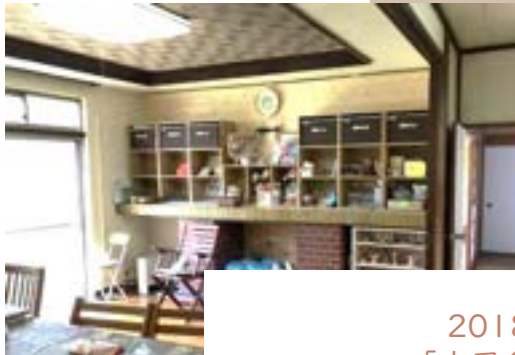


子育てを、まちでプラスに。

**comachi
plus**



2018年度公益財団法人トヨタ財団
「市民参加促進プログラム」実施報告書

居場所を通じた 「自分らしい」市民参加を育む

～こまちぷらすと神奈川県内3つの居場所の実践と学びあい～



D18-PI-0012

豊かな場から広がる地域参画

—主体的な市民が増える場と地域連携の検証

認定特定非営利活動法人 こまちぷらす

目次

第1章	事業概要	
	1. プロジェクトの概要	5
	2. 実施団体および支援対象団体概要	6
	3. 事業の実施体制と体制構築におけるポイント	8
	4. 実施内容およびスケジュール	9
第2章	3団体への支援の方針	
	1. まちの担い手が生まれる居場所モデルについて	10
	2. 各団体におけるまちの担い手が生まれる居場所モデル	11
	3. 内外の環境変化に対応する支援の実施	14
第3章	支援の内容・成果および支援を通じて得たこと	
	1. まちの担い手が生まれる居場所モデルを踏まえた各団体の取り組み	15
	2. 各団体の取り組みから得たこまちぶらすの気付き	19
第4章	各支援対象団体に対する支援	
	1. 各団体への具体的な支援の実施について	21
第5章	支援対象団体に対する交流会型研修の実施	
	1. 交流型集合研修の全体像	24
	2. 交流型集合研修の詳細	24
	3. 団体に関わることで参加者が得た変化や気付き	26
第6章	外部専門家による支援レビューの実施	
	1. 支援対象団体への個別インタビュー	30
	2. 【寄稿】支援対象団体への個別訪問から 室田信一（東京都立大学）	32
第7章	まとめと今後に向けた考察	
	1. 対象団体の選定について	38
	2. 支援の方針・内容について	39
	3. 交流型集合研修を通じた学び合う関係の構築	44
	4. 外部専門家の活用と支援者間のネットワーク	45

図表目次

図

図1. 参加団体及び支援団体の地理的条件	8
図2. こまちカフェモデル	10
図3. こまちカフェモデルにみる各団体の注力活動	11
図4. こまちカフェモデルにおける要素を踏まえた機会の設計	11
図5. 参加の機会とコーディネーター的人材	13
図6. 居場所の「外」の人や団体との縁の活用	19
図7. 参加や活躍の土壌としての「居場所」	19
図8. ぐるんとびーへの支援の構造	21
図9. 子育ての輪Leiへの支援の構造	22
図10. ライフデザインラボへの支援の構造	23
図11. ぐるんとびーが関わる人にもたらす変容プロセス	27
図12. 子育ての輪Leiが関わる人にもたらす変容プロセス	28
図13. ライフデザインラボが関わる人にもたらす変容プロセス	29
図14. インタビューの構造と目論見	30
図15. こまちカフェモデルのアップデート	38
図16. 支援団体の組織文化を踏まえる	39
図17. ジョハリの窓	40
図18. アジャイル型支援の実施	41
図19. 支援経緯の情報発信	42
図20. 外部専門家の活用と支援者間のネットワーク	44

表

表1. 参加団体及び取り組み概要	8
表2. 2019年度スケジュール	9
表3. 2020年度スケジュール	9
表4. こまちカフェモデルにおける5つの「層」	10
表5. こまちカフェモデルにおける事業	10
表6. 支援対象団体の文化	31
表7. 伴走支援を通じて支援対象団体が学んだこと	31
表8. 心理的安全性を損なう要因	40

1. プロジェクトの概要

私たちこまちぷらすは、「子育てが『まちの力』で豊かになる」社会を目指すというビジョンを掲げ、その社会を実現するために「孤立した子育てをなくし、それぞれの人の力が活きる機会をつくる」というミッションに基づいて活動をしています。



「豊かな子育て」環境を実現するために、「まちの中で我が事として子育てに関わる人口を増やす」と、「対話の場と出番をつくる」ことが大きな成果を生み出す「てこ」になると考え、こまちカフェという居場所における対話と出番をつくるコーディネーションに2016年度より取り組んできました。

居場所に様々な参加の機会があり、関わる人同士のコミュニティが形成される中で、その人の「やってみたい」が引き出されること、さらにその「やってみたい」に地域課題や他者のニーズと掛け合わることで、結果的に自身の生活と地域の双方が豊かになることを目指して、こまちカフェという居場所での参加のコーディネートのあり方について考えてきました。



本事業においては、これまでのこまちぷらすの実践を元に、神奈川県内の3つの団体の皆様に向けて、2年間にわたり集合研修と個別訪問を通した伴走支援を実施し、「自分らしい活躍」ができる居場所が様々な地域に増えていくことを目指しました。それぞれの団体において対話と出番のコーディネーションを担う人材が育ち、居場所に様々な「参加の機会」が用意できるよう、必要な視点やそれぞれの団体の強みの活かした活動の設計にも取り組みました。

こまちぷらすより神奈川県内の3団体に向けて

集合研修、個別訪問を通した伴走支援を行い、

「関わる本人の生活が豊かになる参加」が生まれることを目指す。

関わる本人の「やってみたい」が引き出される機会の設計

機会と個人をつなぐコーディネーターの育成

2. 実施団体および支援対象団体概要

認定特定非営利活動法人こまちぷらす概要

神奈川県横浜市戸塚区を拠点に、「子育てがまちの力で豊かになる社会」を目指して活動しています。居場所としての「こまちカフェ」の運営を軸に、カフェにおける様々なイベントの実施や、まちの多様な方々との協働事業等に取り組んでいます。

活動開始:2012年2月

スタッフ人数:41名

登録ボランティア「こまちパートナー」(*) : 198名 (2021年3月末時点)

所在地:神奈川県横浜市戸塚区戸塚町145-6 奈良ビル2階

団体HP:<https://comachiplus.org/>



こまちぷらすHP



こまちカフェHP



※「こまちパートナー」とは、自身の「やってみたい」を大事にしながら、こまちぷらすの活動を共に作る登録ボランティアです。

 飲食	haco+ 雑貨開発&販売	レンタルスペース スペースの貸し出し	おしゃべり会 ・障がい ・ダブルケア ・不登校 ・子育て 定期的に開催
--	--	---	---



ウェルカム
ベビー
プロジェクト

ヤマト運輸(株)との協働プロジェクト
出産祝い作り届ける過程で
子育てへの理解を深める



とつか
フューチャー
セッション

まちの多様な方々との
「対話」から未来を考える



商店会

「とつか宿ほのぼの商和会」
事務局

参加団体及び取り組み概要

ぐるんとびー



Facebook



HP



「地域を一つの大きな家族に」をテーマに、藤沢市大庭で活動しています。災害時等を見据え、普段から助け合える地域を作っておくことの必要性を感じ、子どもからお年寄りまで、相互に学び合い、助け合いながら地域で暮らす場を作るために日々チャレンジしています。団地の一室で小規模多機能型居宅介護、訪問看護事業を運営。2020年4月には地域交流スペースを併設した看護小規模多機能型居宅介護をオープンし、2020年6月にはNPO法人ぐるんとびーを設立。気軽に立ち寄れて、地域の方々の活躍の場にもなる、交流スペースを地域の多世代の方々と一緒に作っていきます。



子育ての輪 Lei



Facebook



BLOG



「コ」育てを共に生き・共に創ることで、輝き・繋がり・輪のきっかけとなるよう一人ひとりが認め合い、尊重し合えることができる世界を目指し活動しています。2019年4月には、空き家を活用した交流拠点「れいんち」をオープン。「ここに来れば誰かに会える」ような居場所となるよう、取り組んでいます。



ライフデザインラボ



Facebook



HP



Kosha33ライフデザインラボは「みんなでつくる 暮らしの実験室」。地域で暮らす人たちが、学び合い、違いを知り、自分を知るための交流拠点です。2018年3月、日本大通りにある神奈川県住宅供給公社の一階にオープンしました。小さな困りごとや願望を言える場所、それを応援する仲間が集まる場所、何かをやってみる「最初的一步」を踏み出せる場所、まずは安全・安心のそんな場所になれるよう目指して活動しています。



	形態	設立	現「居場所」の運営開始時期（固定の場）
①こまちぶらす	NPO法人	2012年	2014年
②ライフデザインラボ	任意団体	2018年	2018年
③ぐるんとびー	株式会社/NPO法人	2015年/2020年	2020年3月
④子育ての輪 lei	NPO法人	2016年	2019年4月

表1：参加団体及び取り組み概要

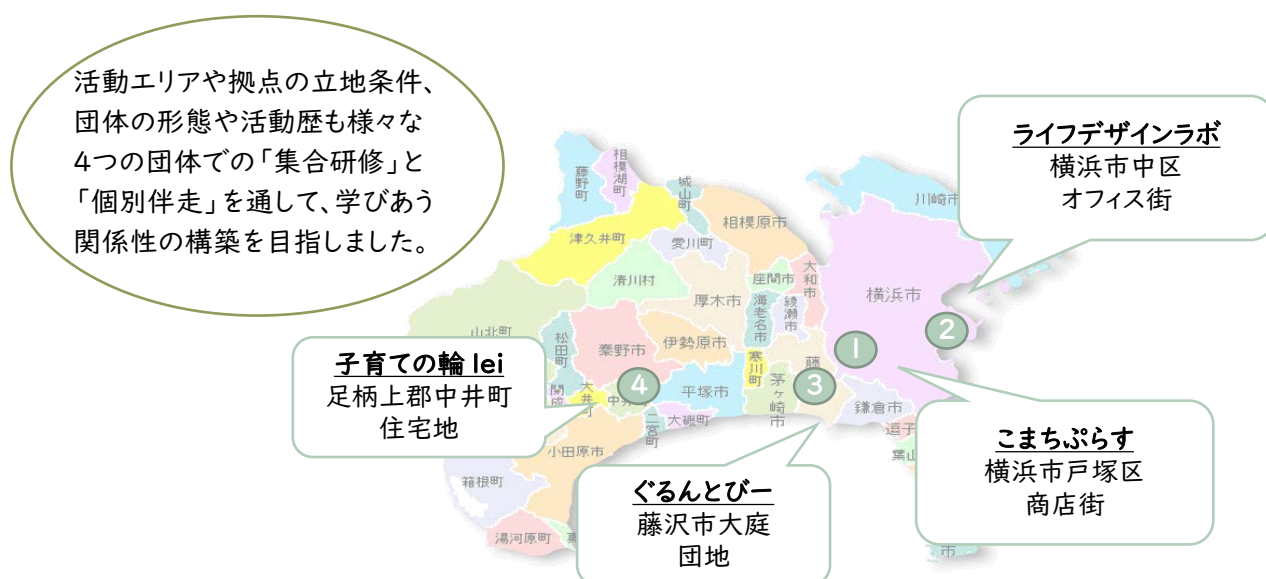


図1：参加団体及び支援団体の地理的条件

3.事業の実施体制と体制構築におけるポイント

こまちぶらす居場所づくりコーディネーターの2名が、集合研修の設計や各団体とのコミュニケーションを担当し、こまちぶらす代表・副代表・経理担当等も助成事業全体の方針や進捗管理に関わる他、参加団体の課題に応じて、専門分野（組織運営の課題や事業性等）についてはチームとして対応してきました。

現在進行形として居場所における参加のコーディネーションを担当しているコーディネーターが、直接研修や個別訪問等も実施したことは今回の大きなポイントであったと考えます。取り組みから見てきたことをノウハウとしてお伝えするだけでなく、現在の工夫や課題も含めて3団体と共有しながら学びあえる関係をつくることを目指しました。

また、参加団体においては、団体の代表も研修に参加することにより、組織としての意思決定や今後の方向性の検討と、現場での取り組みが相互に働くようにしました。（ぐるんとびーについては、都度代表との面談を実施いたしました。）

4.実施内容およびスケジュール

下記日程と内容にて交流型の集合研修「学びあい研修」と個別訪問を実施しました。

【2019年度】

日時	実施	実施内容（研修テーマ・ヒアリング内容）
5月	個別訪問	本事業の説明・各団体の現状や問題意識の聞き取り
7/16	集合研修①	参加団体自己紹介・こまちぶらすの実践紹介 学びあい研修目的・2年間の目標の共有等
9/24	集合研修②	居場所づくりコーディネーターと 参加の機会について
9月	個別訪問	現在の課題とゴール設定・取り組みの数値化等について
11/19	集合研修③	関わる人の思いや充実を考える 横のつながりを生む機会
12/17	集合研修④	地域課題に触れる機会 居場所の事業性と多様な相手との協働
1/28	集合研修⑤	1年間の実践の共有・振り返りと来年度に向けて
1月	個別訪問	2019年度の振り返り、2020年度の取り組みについて等
3/10	中間報告会	本事業を通しての学び、今後について報告

表2:2019年度スケジュール

【2021年度】

日時	実施	実施内容（研修テーマ・ヒアリング内容）
5/26	集合研修①	2019年度の振り返りと2020年度の予定 団体の活動状況の共有
7月	団体別ヒアリング	現状の活動における課題と学びあい研修で取り上げたい テーマについてオンラインにてヒアリング
7/26	集合研修②	団体内でのコミュニケーションについて withコロナでの活動の工夫を共有
9/29	集合研修③	残り半年で力を入れたいこと 目指したい自団体の姿についてワーク
10月	個別訪問②	これまでの振り返りと残り半年の目標設定
11/18	集合研修④	こまちぶらすのコロナ禍での活動と葛藤 個人・団体それぞれの今を話し合う
1月	団体別ヒアリング	外部専門家による研修の振り返り（オンライン）
1/26	集合研修⑤	外部専門家によるヒアリングのフィードバック
2月	団体別訪問	外部専門家による現地訪問
3月	報告会	2年間での取り組み内容・学び・自団体での変化等報告

表3:2020年度スケジュール

1. まちの担い手が生まれる居場所モデルについて

こまちぶらすでは、こまちカフェという居場所を訪れる方々が、カフェでの様々な機会への参加や関わりを通して、主体的に自身の「やってみたい」活動に取り組む「まちの担い手」になることをめざし、様々な機会を設け、その機会と人をつなぐコーディネートに取り組んできました。本事業においては、こまちカフェでの以下の実践を元に3団体への伴走支援を行いました。

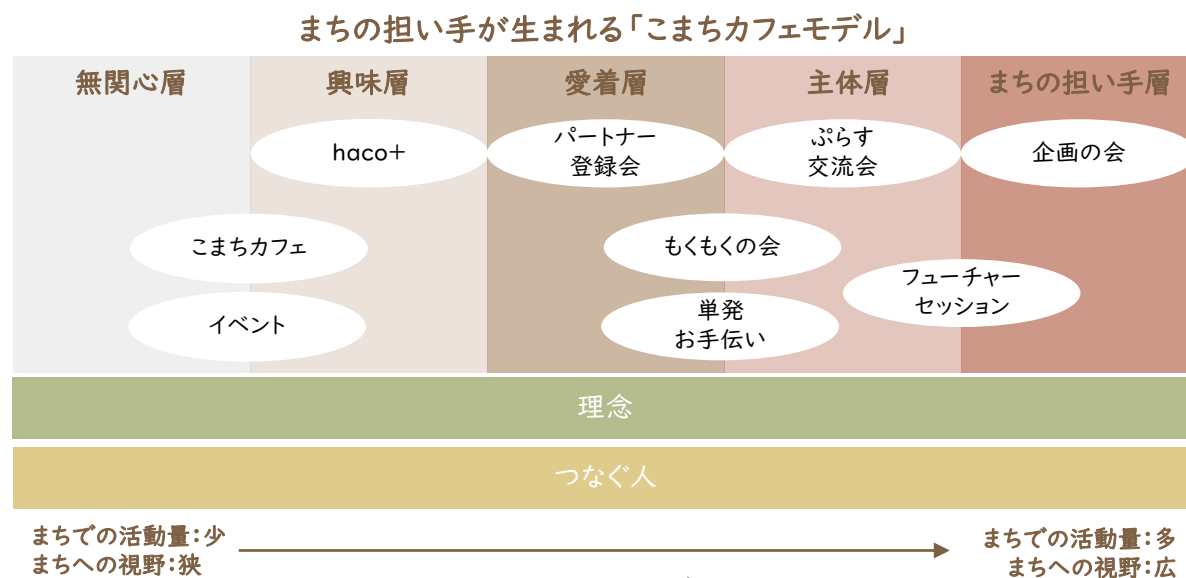


図2: こまちカフェモデル

層名※	内容
無関心層	居場所をまだ知らない・訪れたことがない。
興味層	居場所を訪れたことがある。
愛着層	居場所に通い、知り合いができていく。
主体層	居場所において何か役割を担っている。
まちの担い手層	自分の「やってみたい」をベースに組織の内外を問わず取り組んでいる。

表4: こまちカフェモデルにおける5つの「層」



事業名	内容
イベント	当事者性の高いテーマで互いの思いを話し合う「おしゃべり会」など。
haco+	手作り小物の委託販売を実施。出店者・購入者双方の社会との接点づくり。
こまちパートナー(※)登録説明会	こまちぶらすの理念や活動を知り、ボランティア登録をする機会。
もくもくの会	こまちパートナーの方々がカフェにて1-2時間ほどで終わる軽作業を行う会。
ぶらす交流会	こまちパートナー方々同士がつながる場。交流会や研修会を月1回の半年間実施。
とつかフューチャーセッション	「子育て」「障がい」「介護」等をテーマに様々な立場の方と共に考える会。
企画の会	「やってみたい」を形にする過程をグループで学ぶ場。

表5: こまちカフェモデルにおける事業

※「興味層→愛着層→主体層」は、NPO法人CRファクトリーが考案したプロセスを、こまちぶらすが共同で居場所における場や機会へと応用したものです。「無関心層」や「まちの担い手層」は、本居場所事業のコンテンツとして発展させたものです。

2. 各団体におけるまちの担い手が生まれる居場所モデル

「学びあい研修」では、前頁のこまちカフェモデルにおける「無関心→まちの担い手」の各段階を踏まえ、3つの団体それぞれの団体の現状に即した学びとなるよう、目標を設定しました。各団体において、この2年間で力を入れた部分は下記の図のとおりです。



図3:こまちカフェモデルにみる各団体の注力活動

まちの担い手が生まれる居場所モデルにおける「要素」

上記の「無関心→まちの担い手」モデルにおいて、各段階で重要となる要素について、こまちぷらすでの実践をもとに整理したものを、各団体での「参加の機会」を設計する際のポイントにしました。



図4:こまちカフェモデルにおける要素を踏まえた機会の設計

市民参加の意識の変容プロセスを踏まえて関わる

3団体それぞれ、いずれは自団体や地域で主体的に活動する人が増えることを目指していたものの、本事業においては、「まちの担い手が生まれる居場所モデル」に基づき、参加する側の意識の変容プロセスを踏まえ、「この2年で、どのような人の参加を増やしたいか」にポイントをおいて、活動することが重要であると、学びあい研修や個別訪問を通してお伝えしてきました。各団体のポイントは以下のとおりです。



ぐるんとびーは、2020年3月にオープンする地域交流スペース（看護小規模多機能に併設）の場での新たな参加にポイントを置き、これまで接点を作ることが難しかった子育て世代や、介護保険の対象ではない地域の高齢者が参加できる場とすることを目指し、「無関心・興味層」へのアプローチから始める準備を実施しました。



子育ての輪Leiは2019年4月に空き家を活用した交流拠点「れいんち」をオープンし、その存在を近隣住民に伝えられるようなイベントの開催と、そのイベントに参加される方々と一緒に「れいんち」を運営していくことを目指しました。「無関心・興味層」へのアプローチと共に、そこから「愛着層」へとつながるようビジョンを伝えていく等のコミュニケーションのあり方を模索しました。

ライフデザインラボでは、すでに主体的に活動している「研究員」ひとりひとりの力を活かしながら、新たな参加を生む機会を作っていくこと、新たな参加者と「主体層」である研究員（※）との関わりの中で、「愛着層」が増えていくことを目指しました。

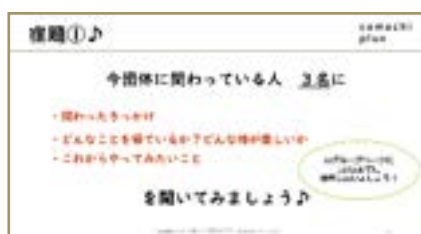
※研究員とは、ライフデザインラボのメンバー。半年ごとに登録更新となり、研究員になった方は月1回の「研究員会議」に参加する他、ラボの活動と一緒に作るメンバーとして参加。



「心理的安全性」の高い組織や場をつくる

無関心層が居場所に初めて足を運んだあと、継続的に通う「愛着層」となるには、「場への安心感」がそこにあることは欠かせません。「また来たい」と思える居心地に加え、「自分もここにいていいんだ」「自分の思いや言葉はここでは否定されない」と感じることでできる「心理的安全性」が、居場所を運営する組織自体にあることが、訪れる方にとっての安心にもつながります。また、心理的安全性が確保された環境では、個人が発言しやすく、コミュニケーションが活発となると言われています。

そのような、「心理的安全性」の高い組織となるには、どのような意識や取り組みが必要となるのか、集合研修ではこまちぷらすの取り組みを紹介し、実際に各団体に関わるボランティアやスタッフ間で思いを聞き合うワークを研修に取り入れ、宿題として自団体でも実践していただきました。



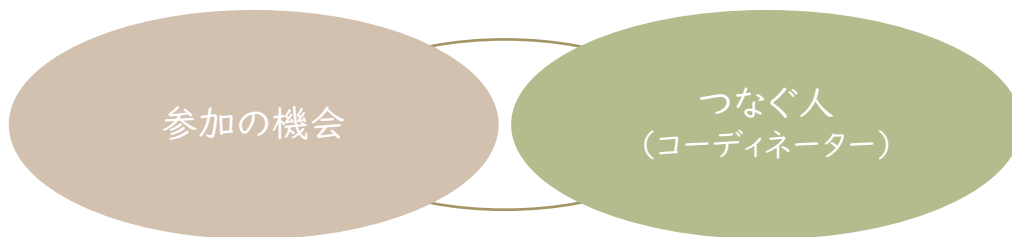
「傾聴」の姿勢で、
否定せず、遮らず、
思いを聴きあう

2019.11.19研修資料より抜粋

人と人、人と機会をつなぐ人の存在を育てて増やす

居場所における参加が増えるには、「無関心層→関心→愛着→主体→まちの担い手」という、段階を追って関わりを深めていく機会があることに加えて、その機会全体を見ながら、人と機会をつなぐ役割を担うコーディネーター的人材が不可欠であると私たちこまちぷらすでは考えています。

本事業では、3つの団体それぞれにおいて複数名のコーディネーター的人材が育ち、様々な機会に人がつながるような仕組みの土台が各団体にできることを目指し、参加の機会を設けることと共に、コーディネーターに必要な視点や意識についても学びあいました。



両輪で
居場所における参加
その人らしい活躍
が育まれる

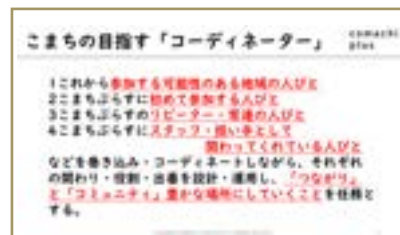


図5: 参加の機会とコーディネーター的人材

2019.9.24 研修資料より抜粋

3. 内外の環境変化に対応する支援の実施

2019-2020年度の2年間取り組んできた中で、各団体の体制等の内部の環境変化や、特に2020年度においては新型コロナウイルスの感染拡大等、社会状況の大きな変化もありました。時に居場所での実践が困難となる中でも、変化に柔軟に対応しながら、居場所における参加について共に学び続けるために、以下の点において工夫をしてきました。

【内的変化への対応】

■組織の体制の変化

コーディネーター的人材が各団体において育つことを目指す中で、組織の体制や人員配置等の都合により、集合研修の参加者が自団体における参加のコーディネートを必ず担えるとは限りません。そのような場合に備えて、集合研修に複数で参加していただき、組織内での共有の機会を持つことも勧めてきました。

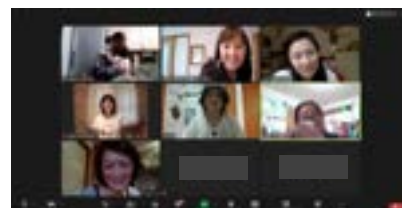
■個人の関わり方の変化

上記のような組織体制に加え、コーディネーターとして関わる本人も自身の生活環境の変化等により団体への関わり方が変化することもあります。その方の都合や希望をふまえて団体に関われることや、複数のチームでコーディネートを担えることの可能性もふまえ、本研修には必ず各団体から複数名での参加をしていただきました。

【外的変化への対応】

■学びあい研修の実施形態の変更

2019年度はこまちカフェのイベントスペースにて行っていた集合研修ですが、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大予防の観点から、オンラインでの実施に切り替えました。オンラインでの実施では、終了後の雑談の中での情報交換や、実施に居場所に足を運ぶことでの気付きを得る機会が減ってしまうことから、2020年度後半は、カフェとオンラインの双方から参加形態を選べるよう設定しました。



■個別ヒアリング・メッセージ等でのコミュニケーションの増加

上記の通り、集合研修がオンラインになったことや、コロナ禍においてそれぞれが居場所の運営に困難さを抱えた状況においては、個別でのヒアリングやコミュニケーションと重要と考え、それぞれの団体の現状についてヒアリングする機会を多く持ちました。団体ごとの訪問やオンラインヒアリングと併せて、メッセージでのやりとりも行いながら、それぞれの葛藤も含めて共有しあえる関係性の維持に努めました。

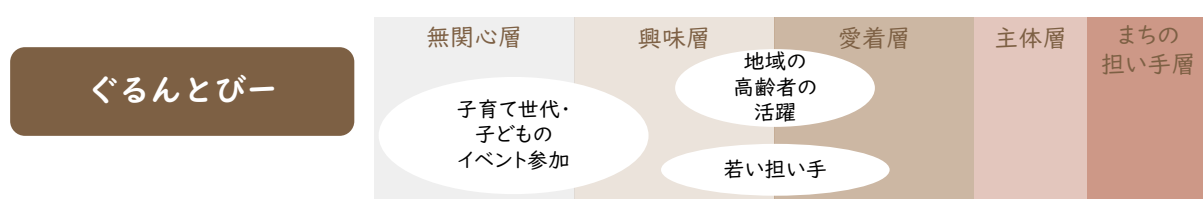


1. まちの担い手が生まれる居場所モデルを踏まえた各団体の取り組み

本章では、前章で述べた支援のポイントに基づいて実施した2年間の「学びあい研修」における、各団体の取り組み内容や成果と、そこからこまちぶらす側が得た気付きについて報告いたします。

市民参加の意識の変容プロセスを踏まえた各団体の取り組み

前章P.11に記載した、各団体が目指した姿や力を入れたポイントについて、各団体が具体的に取り組んだこととその結果です。



目指した姿：介護施設の敷居を下げ、様々な世代が訪れ、地域の高齢者が活躍できる場に

【取り組み内容】

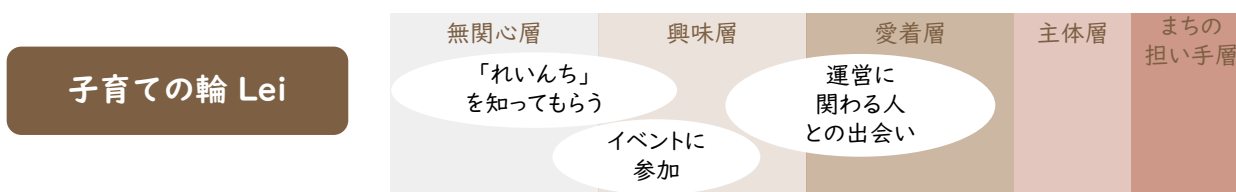
- ・子育ての輪Leiの取り組みを参考に駄菓子屋等、子どもが立ち寄りやすい仕掛けを設計
- ・交流スペースの遊び場の設計においてはこまちカフェを参考にした空間作りを実施
- ・2020年3月のオープン後、多世代の参加できる「まちかど食堂」の実施
- ・交流スペースや屋外にて「産後ケア」や子ども向け「スポトレ」の実施
- ・軒先のスペースを活用した野菜販売・パンの販売等をボランティアと共に実施



【結果】

- ・コロナ禍により、室内での交流イベントは困難となり実施していないものもあるが、軒先での野菜販売等には、通りすがりの方々が初めて立ち寄る機会にもなり、スペースの周知につながっている。
- ・野菜販売、パンの販売等においては、近隣住民のみでなく多様な店主との連携により人が立ち寄る機会を作り出している。
- ・介護施設併設であるが故に、コロナ禍においては活動に制限がかかることを踏まえ、商店街の空き店舗にも新たな拠点を置き、交流の場としての取り組みを開始。

→様々なセクターと共に「立ち寄る機会」の創出
→(コロナ禍で難しい)多世代交流に新たな拠点で挑戦



目指した姿：近隣に「れいんち」の存在を知ってもらい、足を運んでもらえる交流の場に

【取り組み内容】

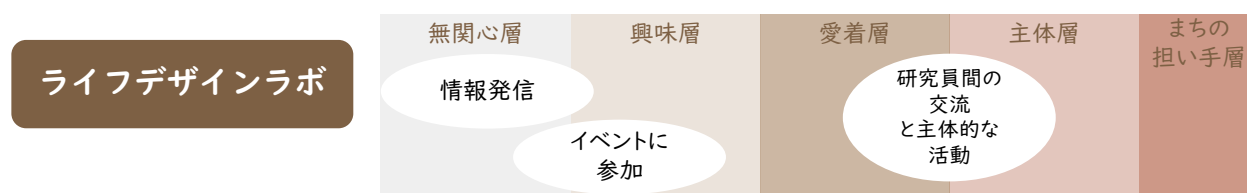
- ・従来のイベントの実施に加えて、月1回「活動説明会」を実施
- ・レンタルキッチン、レンタルスペースの貸し出しの仕組みを整え、2020年12月より活用を開始。
キッチン利用者の作ったパンを「れいんち」の窓際で販売
- ・週1回の「オープンデー」を開催し、ふらりと立ち寄った方とゆっくりと話せる機会を確保
- ・屋外イベントとして、キッチンカー等の店主と連携したイベントの実施



【結果】

- ・活動説明会は、開始当初はあまり人が集まらず、初めて「れいんち」を訪れる方のみでなく、すでに子育ての輪Leiの活動を知っている方々との関わりから見直すこととした。
- ・レンタルキッチンでパンの手作りをされる方が定期的に利用し「週1パン屋さん」として販売し、パンを買いに来る方が「れいんち」に訪れる機会になった。
- ・月1回のオープンデーでは、決めた曜日に開放していることで、スタッフに会いに来てくれる人たちが増え、さらに主体的に手伝う人が現れるようになった。
- ・これまで「出店者」というお客さまだったキッチンカー店主の方々がイベントの企画から一緒に担うようになり、以前よりも主体的に関わるようになった。

→ レンタルスペース利用者・キッチンカー店主等との連携
→ 「開放日」という自由度の高い入口を設けたことでのつながり



目指した姿:主体層のメンバーの交流により新たな参加を生む機会を作る

【取り組み内容】

- ・「愛着層」を対象に、毎週水曜日に作業しに集まる「スイスイデー」を開催。
- ・「研究員会議」という研究員同士のミーティングを月1回開催し、それぞれの思いやチャレンジしたいことを共有する時間を持つ。
- ・(コロナ禍において交流スペース閉鎖の間)、オンラインで研究員どうしがつながり続ける方法を模索。
- ・「委員会方式」として、複数のテーマから自身の興味にあった活動を選んで参加する仕組みを導入。
- ・情報発信に力を入れ、場に訪れることが難しい中でも情報に触れることを通じてその人の暮らしが豊かになることを目指す。メールマガジン「ライフデザイン通信」のスタート。



【結果】

- ・スイスイデーとして曜日を固定することで、「ラボに行く日」として認識され集まるメンバーができた。
- ・(特にコロナ禍においては) 研究員どうして様々なトライアルを重ねることで、オンラインでのイベント開催や、勉強会等、外部向けの開催へとつながった。
- ・研究員の中でも、自身の興味のある部門をそれぞれが担う仕組みを作り、SNSでの情報発信等様々なメンバーが担うようになった。

→形にする前に「試せる」相手の存在があることで実現
→自身の関わりを選べることでの活躍

心理的安全性の高い組織や場所をつくる各団体の取り組み

ぐるんとびー

介護事業所で働きながら、ボランティアで地域活動に関わるスタッフに、学びあい研修参加者が、「（地域活動）に関わったきっかけ」「関わることで得ていること」についてのインタビューを実施し、スタッフ同士が思いに触れあう機会を作り、これからやりたいことや地域への思いを確認しあいました。

子育ての輪 Lei

学びあい研修で使用したワークシートを活用して全理事・スタッフとの面談を実施し、団体への関わり方の希望等について確認しました。また、スタッフ間で話し合われたことについて、その場にいなかったメンバーにもLINE等での共有を取り入れ、同じ情報を持って活動に参加しているという意識や安心感につながりました。

ライフデザインラボ

学びあい研修参加者が、研究員全員に「ラボに関わったきっかけ」「関わることで得ていること」についてインタビューを実施しました。また、コロナ禍においては、オンラインにて研究員どうしが各々の気持ちを共有する時間を週に1回設け、こまめなコミュニケーションを行いました。

人と人、人と機会をつなぐ人の存在を育てて増やす各団体の取り組み

ぐるんとびー

本事業開始当初から研修に参加した介護事業所スタッフに加えて、地域交流専任のコーディネーターとして新たに人を配置しました。スタッフとしてのみでなく、住民としての立場でも地域活動（自治会・まちづくり推進）に関わりながら、交流スペースと地域住民とをつなぐ役割を、介護事業スタッフと地域交流専任スタッフとの連携で進めてくこととしました。

子育ての輪 Lei

組織の代表・副代表（当時）で研修に参加後、集合型研修での学びを組織内でスタッフに共有しました。組織全体の運営を見ながら外部の方々との連携を担当するコーディネーターと、「れいんち」のレンタルキッチンへの貸し出し等、居場所の中のコーディネーターの双方を置く体制を今後整えていきます。

ライフデザインラボ

組織の代表に加え、3名が学びあい研修に参加したことで、組織のビジョンや活動のあり方を一緒に考えるメンバーが増えました。また、「無関心層」への情報発信・「興味層」へのイベント企画・「愛着層」でのコミュニティ形成、それぞれの取り組みを各段階ごとに「委員会」として手を挙げたメンバーが取り組むことで、メンバー全員で参加の仕組みを支える体制を目指しています。

2. 各団体の取り組みから得たこまちぷらすの気付き

居場所の「外」の人や団体との縁の活用

居場所の中をあたためていくために、すでにその団体が持っている人や団体との縁を活かすことで、居場所における参加の機会の可能性が広がることも分かりました。ぐるんとびーの「野菜販売」や、子育ての輪Leiのキッチンカーの方々とのコラボイベントやパン販売などは、相手方としては、販売という形での関わりとなりますが、そこに買いに集まる方々との接点を一緒に作っていることにもなります。

居場所を作ろうとしている私たち自身が、居場所の外においても多様な人や団体とつながっていることが、居場所の中の多様さにも反映されるものだとして今回のそれぞれの団体の取り組みを通して改めて気付きました。

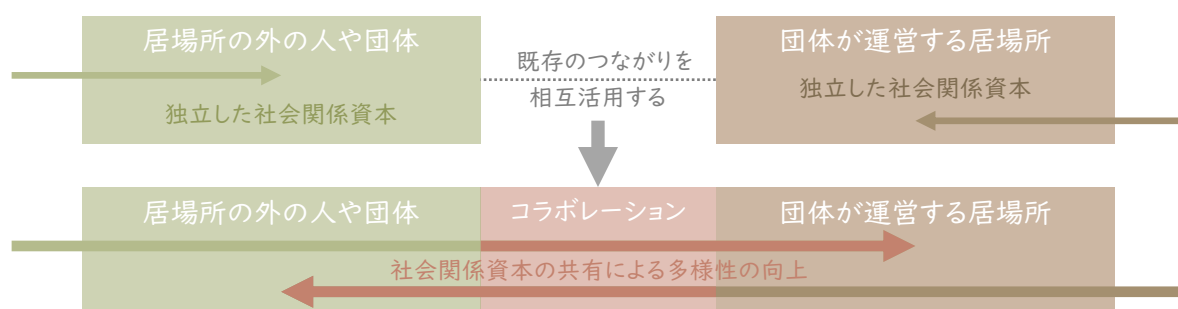


図6: 居場所の「外」の人や団体との縁の活用

参加や活躍の土壌としての「居場所」

本取り組みの2年目は、4つの団体がそれぞれコロナ禍での活動となり、「居場所」であり続けること自体にどの団体も苦勞してきました。その苦勞を通して改めて気がついたことは、「居場所における市民参加」を考える際、当然のことながら、そこに「居場所」という土壌があることで、関わりが育ち、「参加」が生まれるということでした。

足を運んでももらえない、集えない、つながれないという状況の中、どう「参加」を生み出すかと焦る気持ちになることもありましたが、立ち止まらないといけなかった時期だからこそ、自分たち自身のありたい姿、つくりたい場の姿を確認できました。関わる人の安心や居心地、人とのつながりを感じられる場に立つ人がいてこそ、「居場所」で有り続けることができ「参加」が生まれることに気づきました。「居場所」としての土壌があって、「参加」が生まれることを再確認した1年でした。

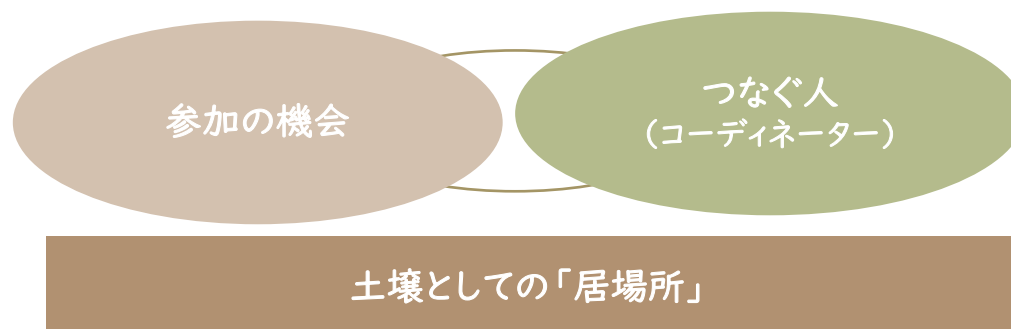


図7: 参加や活躍の土壌としての「居場所」

モデルから自団体に取り入れる際の「アレンジ」

事例としてお伝えした「こまちカフェモデル」から、各団体が「参加の機会」を取り入れる際、または取り入れた後、自身の団体の特色やその機会の目的に合わせたアジャスト、アレンジが大事になりますが、どのようなアレンジが必要となるのか、私たちこまちぶらすもあらかじめその答えを持っているわけではなく、今回の取り組みにおいても、モデルの導入における難しさを感じたところでもありました。一方で、アレンジの答えを仮に持っていたとしても、各団体が「自身で答えを見つける過程」に4団体がお互いに立ち会いながら、それぞれが自団体のスタイルを作っていくことが大事であると考えています。

それと同時に、それぞれが自団体のスタイルを作っていく過程で重ねた工夫、感じた課題や手応えなどを記録しておき、他団体に共有できるようにしておくことも重要となります。そうすることで、これから「居場所における参加」に取り組もうとされる団体や人に、自分たちの得た気付きやノウハウを共有できることにもつながります。



人と人、人と機会をつなぐ人の存在のあり方

本事業においては、各団体から2名以上のコーディネーター的人材の参加を要件としました。組織の中で複数名でのチームワークで居場所における参加のコーディネートができる体制が整うことを目指したからです。その結果、研修にはぐるんとびーから3名、子育ての輪Leiから2名、ライフデザインラボから4名で参加していただきましたが、研修終了後、実際に自団体にてコーディネーターを複数名配置することについては、体制的にも処遇的にもどの団体でも安定してそれができるといことが難しいということも分かりました。

多くの居場所の現状として、団体運営の責任者自身がコーディネートも担うことが多く業務が手一杯になってしまうことや、無償で働いているメンバーで成り立っている活動においては、有償のコーディネーターを複数置くということ自体にハードルが高いという現状もあります。

今回、ぐるんとびーでは専任スタッフを1名置き、介護スタッフや地域住民との連携の中でコーディネートを進めていくことになったように、コーディネーターとその他の職種の連携は大きな鍵となります。また、子育ての輪Leiのように、居場所の中と外をそれぞれ担う人を置くという形も、その組織らしいあり方です。ライフデザインラボでは、自分たちがより主体的に活動できる仕組みを多くのメンバーで支えようとしています。

このようにして、それぞれの団体において「可能な形」と「目指したい形」の両方を意識しながら、自団体らしい体制を作ること、そしてつなぎ役であるコーディネーターが育っていく重要性に、本事業をとおして私たちも改めて気付かされました。

1. 各団体への具体的な支援の実施について

本章では、集合研修と個別訪問を通して実施した各団体への具体的な支援について報告します。

ぐるんとびー

【研修参加者】

介護事業所スタッフ2名・(2020年度後半～)地域交流専任コーディネーター1名 計3名

【支援の背景】

これまで団地の7階で運営していた介護事業所に加え、地域との接点をより多く持つことを目的に2020年4月に新たに交流スペース併設の介護事業所をオープンしました。交流スペースが介護施設の敷居を下げ、多世代や地域の高齢者が活躍できる居場所となることを目指しました。

【具体的な支援内容】

- 居場所を作るにあたっての組織全体の共通理解への支援
- 研修参加者、団体代表への個別ヒアリングの実施
- 多様な地域住民が参加できる機会についての事例共有
- 地域交流専任のコーディネーター配置の提案

【支援の経緯】

2019年度は交流スペースのオープンに向けて、居場所づくりのあり方や、どのような参加を増やしたいか等について話し合う機会を多く持ちました。2020年4月のオープン後は、様々な立場の方と連携により、地域の方がスペースに足を運ぶ機会を作ることに取り組みました。

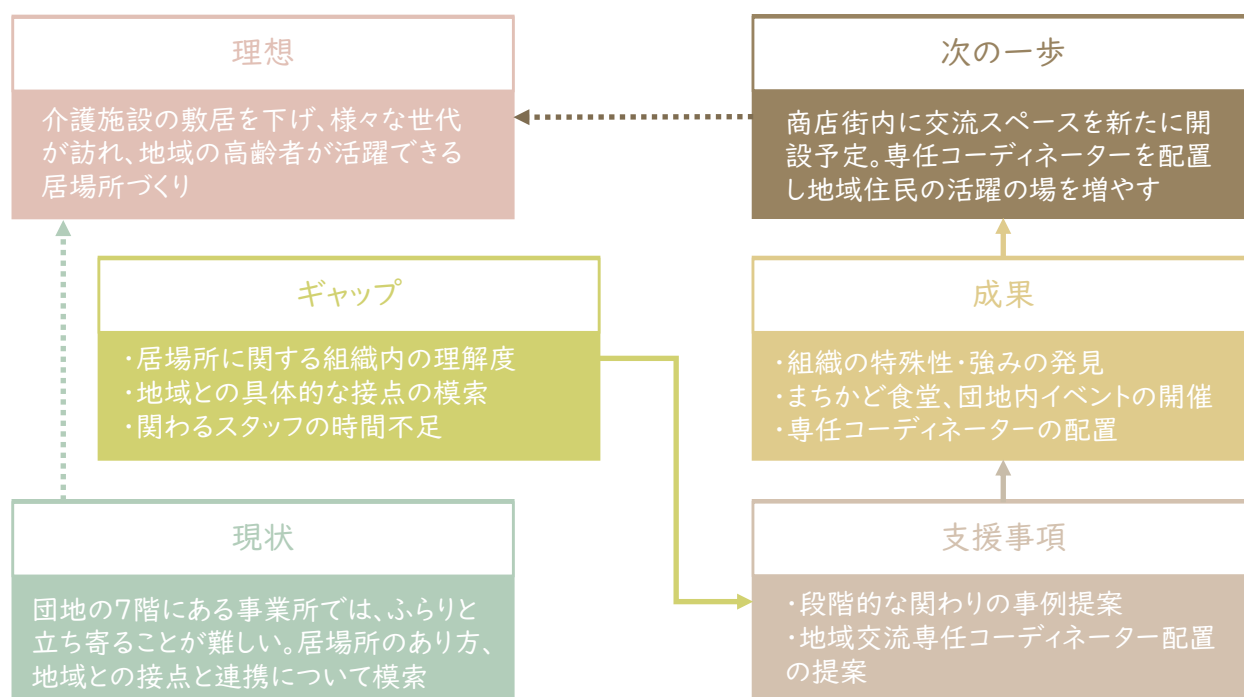


図8:ぐるんとびーへの支援の構造

子育ての輪 Lei

【研修参加者】

代表1名・副代表(当時)1名 計2名

【支援の背景】

2019年に空き家を活用した交流拠点「れいんち」をオープンし、近隣住民をはじめとした様々な人が交流する居場所を目指しました。一方で、子育ての輪Leiの活動内容や「れいんち」の存在を伝える機会を持つことや、初めて足を運んでもらう機会を作ることには難しさも感じ、学びの機会を必要としていました。

【具体的な支援内容】

- イベント件数や参加人数等を事業実績表にて管理することを提案
- こまちぷらすで使用している面談シートの共有
- スタッフ同士の対話とコミュニケーションの事例紹介
- 菓子製造レンタルキッチンの導入と会員制度の仕組みの事例共有

【支援の経緯】

活動内容と事業全体の動きを可視化して関わるスタッフに共有し、外部のイベント参加者にも伝える機会を創出することを目指しました。またスタッフ同士がじっくり話す機会が少なかったため、面談シートを使いながら本人のやりたいこと、関わる理由を話す機会をつくり、相互理解を深めました。

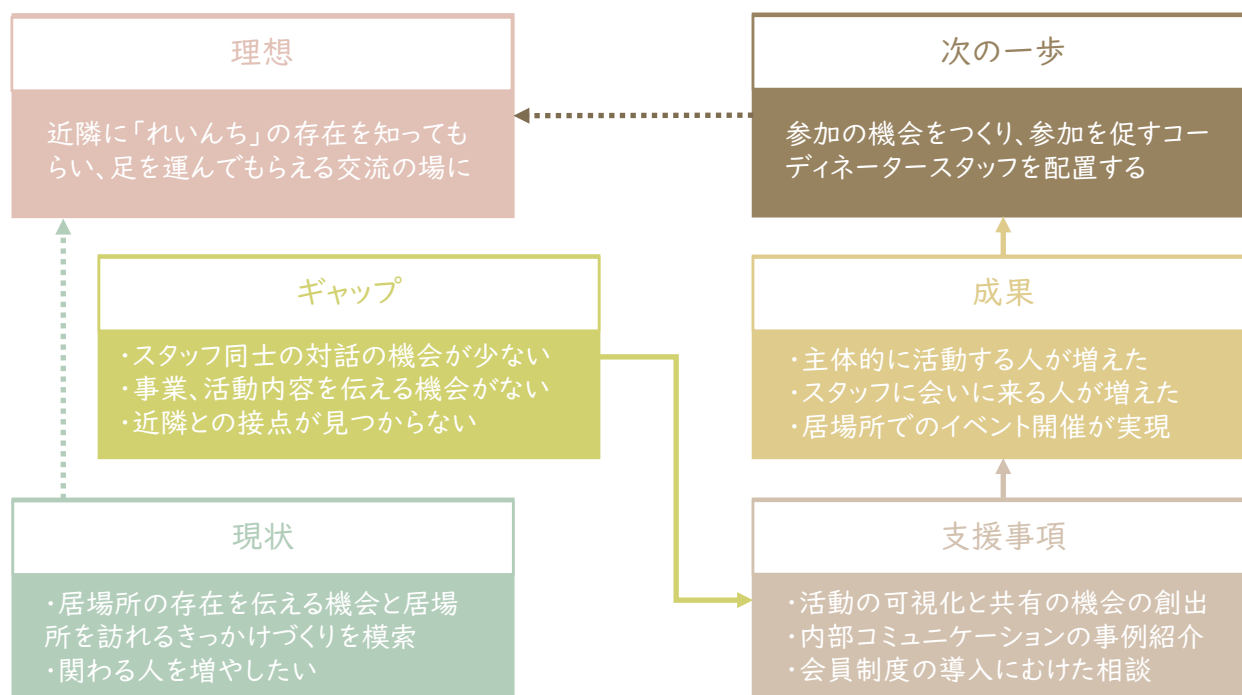


図9: 子育ての輪Leiの支援の構造

ライフデザインラボ

【研修参加者】

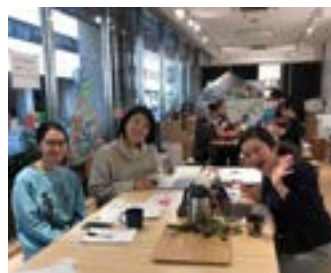
所長1名・研究員3名 計4名

【支援の背景】

ライフデザインラボでは、すでに主体的に活動している※「研究員」ひとりひとりの力を活かしながら、新たな参加を生む機会を作っていくことを目指しています。研究員の多くは活動の軸を他に持っている方も多く、コミュニケーションを取りながらどう団体と関わり続けていくのかコミュニティのあり方について模索しました。

【具体的な支援内容】

- 他団体の運営、参加の取り組み事例を伝える
- 組織運営についての個別相談
- 活動の現状と自身の思いを言語化する機会の創出



【支援の経緯】

研究員同士で作るイベントの多くは、研究員会議での発言や、前後の雑談から生まれることが多く見られました。コロナ禍により、3か月間居場所の利用を停止したことから、研究員がオンラインのつながり続ける方法を模索しました。

※研究員とは、ライフデザインラボのメンバー。半年ごとに登録更新となり、研究員になった方は月1回の「研究員会議」に参加する他、ラボの活動を一緒に作るメンバーとして参加。

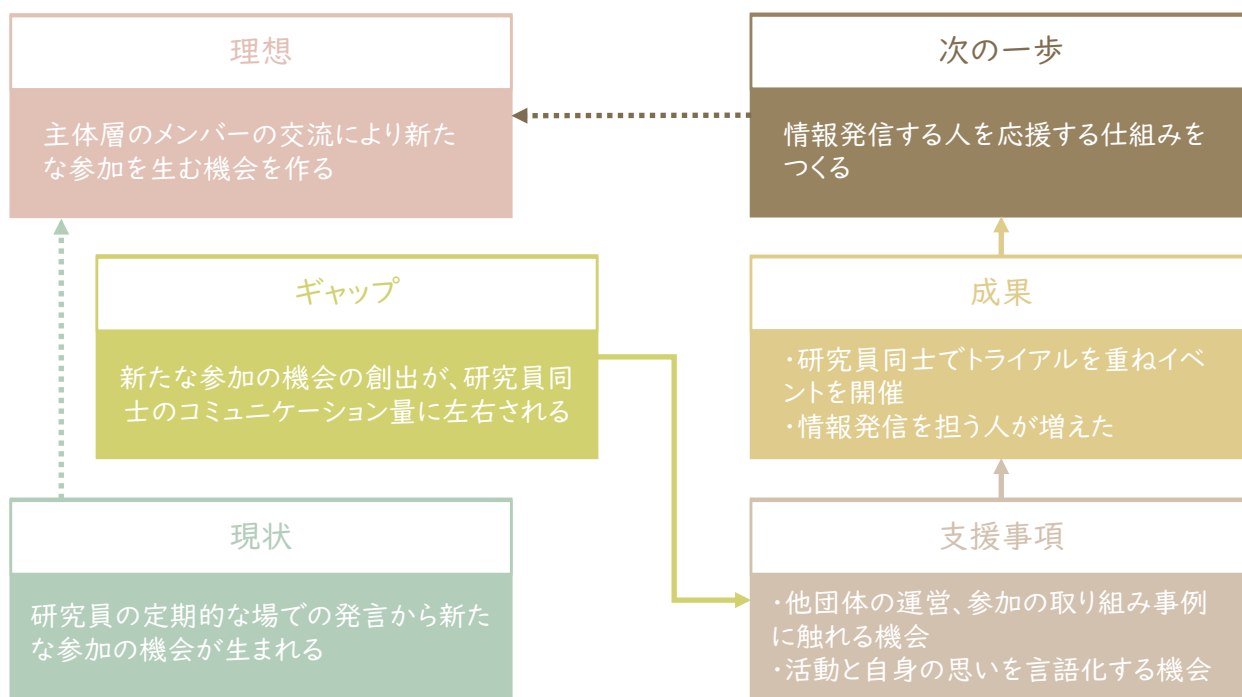


図10:ライフデザインラボの支援の構造

1. 交流型集合研修の全体像

本章では、4つの団体が集まり、グループワークや情報交換を通じた交流に重点を置きながら開催した交流型の集合研修「学びあい研修」について詳細をお伝えします。

【研修の目的】

- ①居場所において関わる人自身の主体的な活動が生まれる機会をつくる
- ②その機会をコーディネートする上で必要な視点を学ぶ
- ③団体同士の異なる視点や活動をヒントに学びあう関係性をつくる

【研修の回数および構成】

回数：年全5回、計10回

時間：120分 参加者：各団体2名以上

- ①近況報告+宿題共有（20分）
- ②こまちぶらすによる講義or話題提供（20分-30分）
- ③ワーク（20分-30分）
- ④ワーク全体共有（10分）
- ⑤質問・感想 + 宿題の提示（2-30分）



2. 研修の詳細

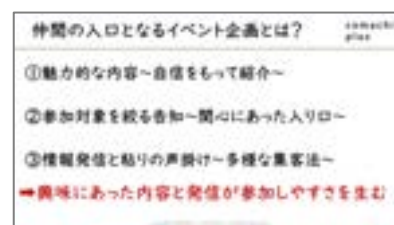
【2019年】

第1回：キックオフ・団体の相互理解（7/16）

- ・学びあい研修目的と2年間の目標共有など
- ・参加団体自己紹介
- ・こまちぶらすの実践紹介

第2回：参加の機会と居場所づくりコーディネーターとは（9/24）

- ・イベントの運営と集客・
- ・つながるきっかけや雰囲気づくり
- ・団体の理念と個人の思いを知る機会



第3回：関わる人の思いや充実を考える・横のつながりを生む機会について（11/19）

- ・関わる人の「思い」・「充実」を考える
- ・ボランティア登録会について
- ・「やってみたい」を育み続ける「役立ち感・仲間・学び・足踏み」の機会について

第4回：地域課題に触れる機会・居場所の事業性と協働（12/17）

- ・「やってみたい」を応援し合える関係性
- ・誰かの困ったに触れる機会
- ・多様な相手との協働事業例

第5回：1年間の実践の共有・振り返りを個人で発表

- ・この2年で目指したこと
- ・研修を通しての気付き・学び・チャレンジしたこと
- ・来年度力をいれること



【2020年】

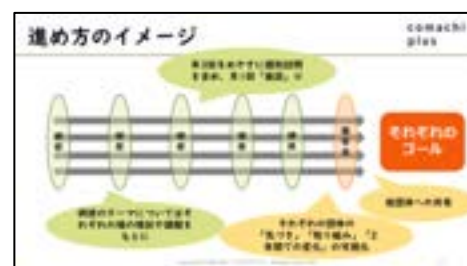
2020年度はコロナ禍によりオンライン中心の「学びあい研修」となりましたが、それぞれの現状、課題や取り上げたいテーマに応じた研修を組み立てて実施しました。居場所を開くことが難しい時期もあり、団体の活動状況や今後の動き方を情報交換しながらも居場所のあり方そのものを考える機会も作りました。

第1回：2020年度キックオフ(5/26)

事前課題をもとに

- ・2019年度の振り返り
- ・団体の活動状況
- ・2020年度の予定について

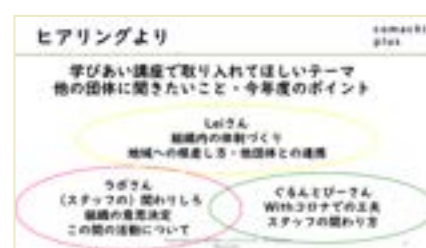
宿題：2020年度力をいれたいことを団体で話し合う



第2回：団体内のコミュニケーション

withコロナでの活動(7/28)

- ・対面や場に来る際の対応(リスク対応・ガイドラインなど)
- ・(新たにor代わりに)取り組んだこと(オンラインなど)
- ・気になる方・心配な方との接点
- ・スタッフ間・メンバー間のコミュニケーション



第3回：残り半年で力をいれたいこと・目指したい自団体の姿について(9/29)

事前課題をもとに団体ごとに発表し合い、個人としての動き方も考えました。

《事前課題》

- ・当初、どんな人のどんな参加/関わりが生まれる/増えることを目指したか
- ・今どうなっているか?
- ・関わりが生まれた場合何が効果的だったか?
- ・関わりが生まれなかったのは何故か(障壁になったことなど)
- それを踏まえ個々で動き方を考え発表
- ・誰を対象に/どこで/いつ/誰が担当/何をする



第4回：こまちぶらすのコロナ禍での活動と葛藤・個人団体それぞれの今を話し合う(9/29)

《話題提供》

withコロナのこまちぶらすの活動～居場所としてどういられるか～

- ・関係を深めることと「ソーシャルディスタンス」
- ・「安心」を多面的に
- ・つながる機会を持続ける
- それを踏まえ団体ごとのワーク
- ・「居場所・コミュニティ」としてどうありたいか?
- ・自分がどう関わりたいか?
- ・どんなことをしたいか?どんな不安があるか?



第5回：外部専門家(株式会社イミカ原田氏)によるヒアリングのフィードバック(1/26)

- ・フィードバックを受けての感想(自団体のありたい姿・得たヒント・次の一歩をふまえて)
- ・自分たちの団体の強みと、自分たちの場ならではの「参加」について
- ・今後団体でやりたいこと

3. 団体に関わることで参加者が得た変化や気づき～「団体×私アンケート」より～

3つの団体の活動が、関わる方々にとってどのような存在であるかを知り、今後の活動に活かすため、それぞれの団体に関わる方を対象に、2021年2月初旬～下旬にアンケートを実施いたしました。アンケートの対象と概要は以下のとおりです。

【アンケート実施概要】

■ 目的

3団体の活動に関わる方々の声から

- ・自身の運営する場のもたらす意味を知ることと共に、
- ・「関わる方々」の目線から自身の活動を見直すことで、

→ 自団体における「参加」のあり方や、今後も大切にしたい姿勢や機会を考える。

■ 対象

それぞれの団体の活動に参加する方

- ・ぐるんとびー/地域活動に取り組むスタッフ
- ・子育ての輪Lei/スタッフ、ボランティア、イベント運営に携わる方
- ・ライフデザインラボ/研究員（運営メンバー）

■ 質問内容（3団体共通）

- ・活動を知ったきっかけ
- ・活動に関わる理由と期待
- ・自身の生活にもたらした変化
- ・今後の関わり方について望むこと
- ・自身にとってその団体の存在 等 計11問

■ 実施方法

オンラインフォームへの入力を各団体より対象者に呼びかけ

■ 実施期間

2021年2月9日～2月20日

上記アンケートの回答結果を分析し、3つの団体の「参加の場」としての特徴や、それぞれの団体で起きている「循環」について、次にまとめます。

アンケート結果から見てきたこと～ぐるんとびー～

対象：地域活動に
取り組むスタッフ
回答：12名

【知ったきっかけ】 人を引きつけるビジョンと発信力

「SNS」「代表の講演・発信」「地域での関わり」

【関わった理由】 目指す社会への共感・実現への思い

「理念への共感」「自分も一緒に目指したい」

「地域をひとつの大きな家族に」に共感し、
自分もそのワンピースになりたいと思った。

【自身に起こった変化】 現実との出会い・一緒に目指す仲間を得る

「ものの見え方や意識の変化」「現実の困難さに直面」「仲間を得た」

スタッフが応援してくれることで、一人で行っている
活動じゃないと再実感しました。

【今後やりたいこと】 助け合える地域・居場所のある地域

「多世代交流」「地域のつながり」「災害時」

【ぐるんとびーをどう表現する？】 地域を自分ごと化する場・チームで大きなチャレンジ

「学び」「チャレンジ」「固定観念を壊す」「仲間」

「一緒に考えてくれる仲間がいる場所」

相当きつくてもめちゃめちゃ悩むけど、
その分楽しみもある地域の暮らし。

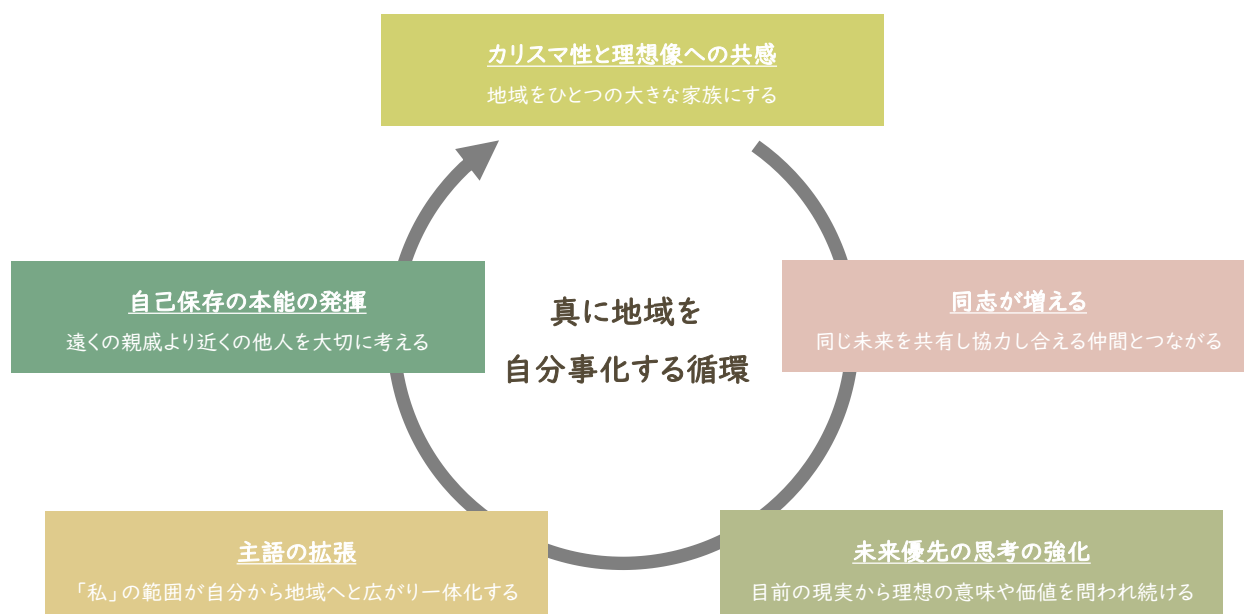


図11：ぐるんとびーが関わる人にもたらす変容プロセス

アンケート結果から見てきたこと～子育ての輪Lei～

対象：理事・スタッフ
イベント出店者
回答：9名

【知ったきっかけ】 知人からの口コミや働きかけ

「知人からの紹介」「イベント」「SNS」

【関わった理由】 スタッフの人柄・居心地・安心感

「自分にもできることがありそう」「居心地、雰囲気」

初めてイベントに参加した時に雰囲気が心地よくて、
自分も一緒に参加したいと思った。

【自身に起こった変化】 一歩踏み出し、自信を得る

「自信につながった」「積極的になれた」「安心」

大変な時もあったけれど、好きでやってきたことが
自信につながりました。

向かう場所がある、待っていてくれる場所がある安心感は
こんなにありがたいものなんだと実感。

【今後やりたいこと】 次の人の背中を押す・次世代へ渡す

「相手を応援」「子ども・子育て支援の取り組み」「多世代交流」

【Leiをどう表現する？】 あたたかさ・自然体・安心

「パワーをもらえる」「あたたかみ」「癒やし」「仲間」「安心」

素直に話しができる安心な場所

大きな笑顔のパワーをもらえる

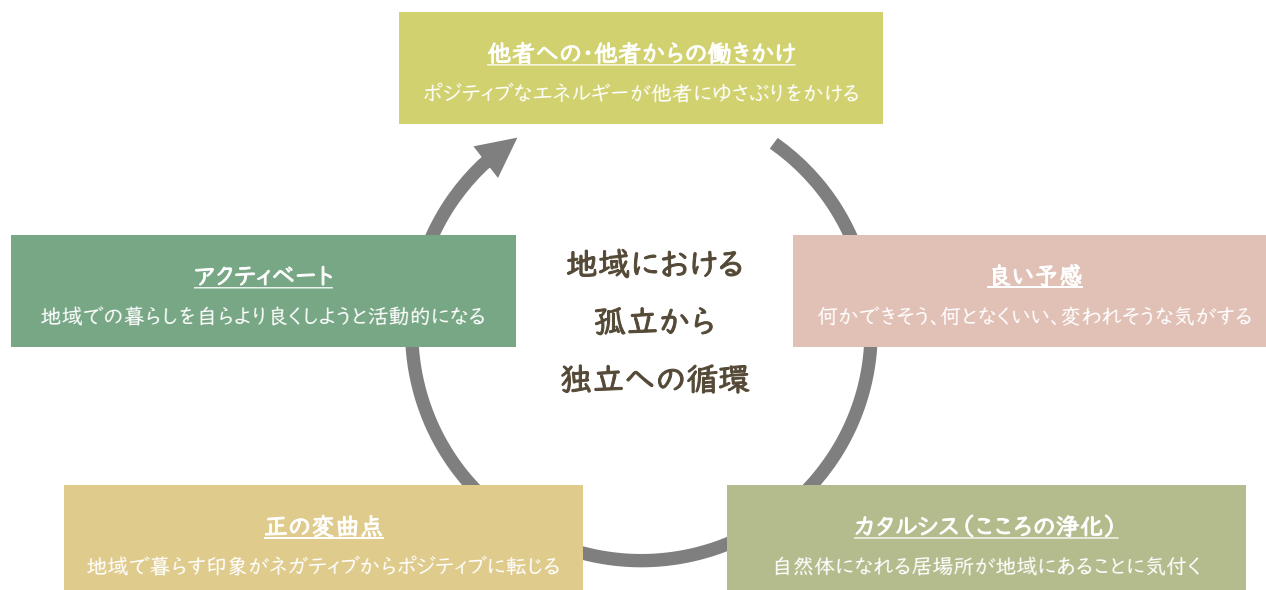


図12: 子育ての輪Leiが関わる人にもたらす変容プロセス

アンケート結果から見てきたこと～ライフデザインラボ～

対象：研究員
回答：18名

【知ったきっかけ】 魅力的で信頼できる人からの誘い

「所長からの誘い」「スタッフからの誘い」「SNS・イベント」

子育て中の先輩ママさん達が色々な活動をされている事にふれ、
自分も何かしてみたい!と思ったのがきっかけです。

【関わった理由】 新たな広がりへの期待感

「様々な人との出会い」「面白そう」「視野の広がり」

【自身に起こった変化】 自分と異なるものとの出会いや変化への関心の高まり

「意識の変化」「興味関心」「人間関係」「モチベーション」「ロールモデルとの出会い」

皆さんの熱い思いに触発され、活力になる。また次なるアイデアの
ヒントになる、一歩踏み出してみよう!と感じることができます

自分より年上の女性達と出会えた事で、自分の5年後、10年後、
さらにその先に彼女達のように輝いていたいなと思いました。

【ラボをどう表現する?】 出会いのある場・一歩踏み出せる場・互いを尊重して高め合う

色々な人が集まって、自分の興味・関心があることの活動をしている場所。
人生には色々な人がいることが楽しい、と思えたら、きっとラボの活動は楽
しいと思う!

「一緒に考えてくれる仲間がいる場所」

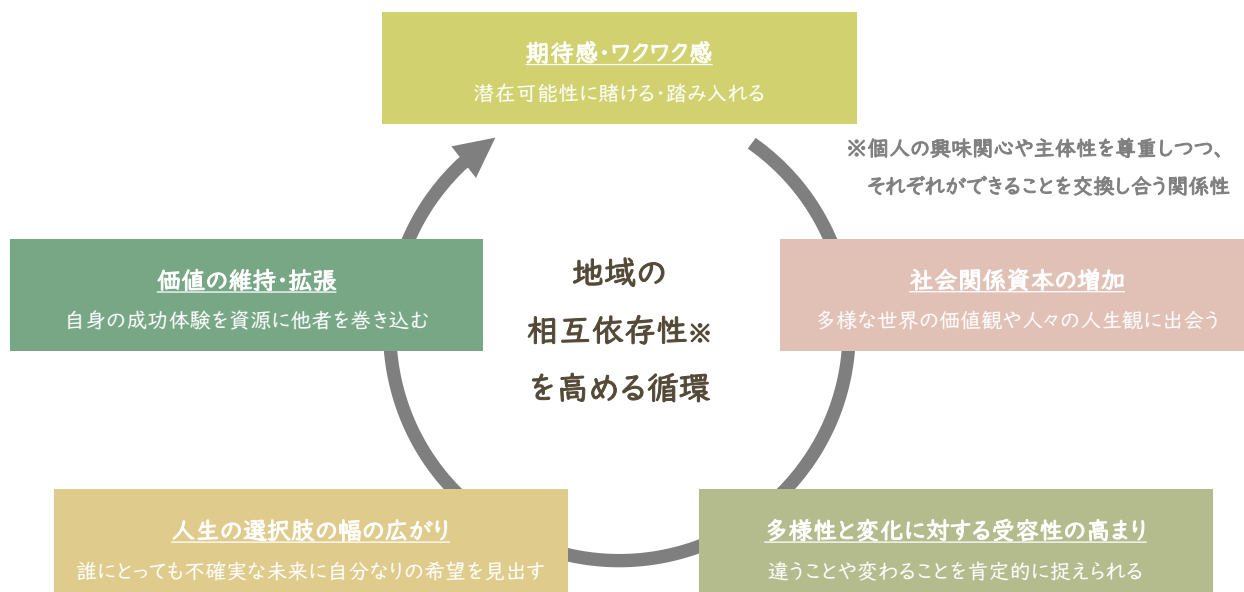


図13: ライフデザインラボに関わる人にもたらす変容プロセス

本事業では、個別インタビューによる「学びあい研修」の振り返りと、個別訪問によるそれぞれの団体の強みと今後の可能性の考察について、2名の外部専門家の協力いただきました。本章ではその結果についてお伝えします。

1. 支援対象団体への個別インタビュー

インタビューの構造と目論見

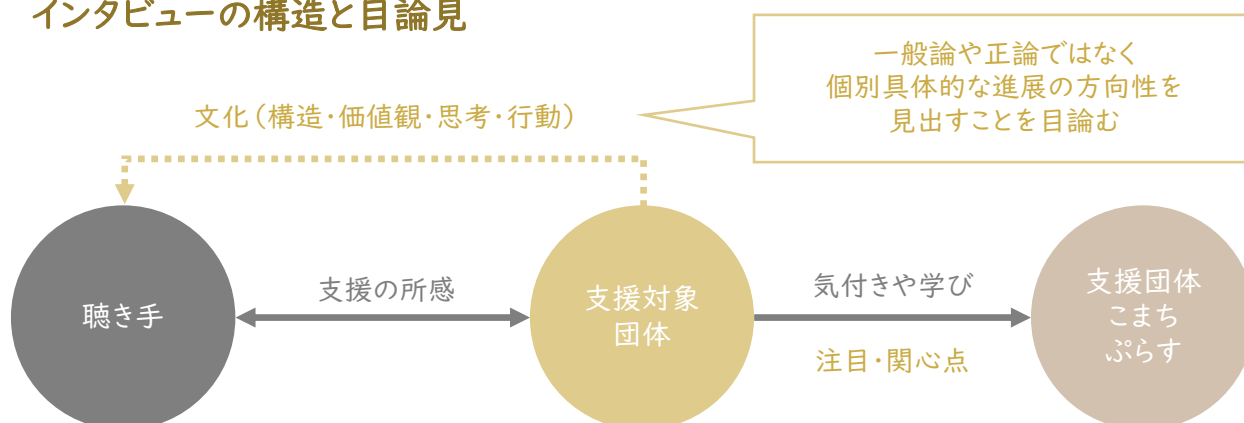


図14:インタビューの構造と目論見

支援対象団体への個別インタビューは大きく2つを目的としています。一つは、団体の文化を把握することです。ここでいう文化とは、組織が共通的に備える価値観や行動パターンのことを指しています。もう一つは、団体が支援団体（こまちぷらす）から学び、吸収した点を把握することです。

これらにより、支援団体が「伝えたこと」ではなく、支援対象団体に「伝わったこと」を知ることができ、また、支援対象団体の文化を踏まえることで、支援対象団体の組織的特徴に応じた支援のあり方を考察することができます。

インタビューは、外部専門家として、原田博一氏（株式会社イミカ代表）の協力を得て実施しました。

各団体の主な語り

ライフデザインラボ

地域の担い手づくり講座では、市民参加の段階を見極めながら関わることなどを学び、実践してきた。伴走支援では、経験をコンテンツにして伝えていくことや、メンバーが楽しみながら活動できる工夫をすることの大切さを学んだ。全体を通して、こまちぷらすに苦んでいる姿が最大の支援価値であったと感じた。

ぐるんとびー

かねてより高齢者中心の活動であったことから、こまちぷらすの、多世代（地域全体）を巻き込む活動には憧れていた。伴走支援では、地域交流スペースの開設にあたって、子どもが入りやすい内装にするなど、利用者視点での空間づくりの大切さを学んだ。

子育ての輪Lei

地域のコミュニティ活動が事業として成立している、大きな結果を出している団体の支援を受けられることが率直に嬉しかった。伴走支援を通じて、資金調達や内部コミュニケーション、ファンとの関係構築など、組織の弱点を自覚し、対策に繋げることができた。



支援対象団体の文化

インタビューから、支援対象団体の中心的な態度を見出しました。またこの態度は、各団体の「ありたい地域の姿」を反映していることが伺えました。

団体	ありたい地域の姿	中心的な態度
ライフデザインラボ	何ができるか分からないけれど、何かやりたい人がそれに気づいて取り組める、いまの自分で諦めず、次の自分に価値や希望を見出せる地域でありたい。	Enabler イネーブラー (後援者)
ぐるんとびー (地域交流スペース)	誰も取りこぼさない、多様性を資源としたまちづくりで、地域をひとつの大きな家族とし、住民(家族)ひとりひとりが役割を発揮し、生き甲斐が高まる地域でありたい。	Supporter サポーター (援助者)
子育ての輪Lei	子育て世代から広がる多世代コミュニティづくりで、安心して暮らせる助け合いの関係性があり、子どもも大人も楽しみながら成長できる地域でありたい。	Planner プランナー (企画者)

表6: 支援対象団体の文化

伴走支援を通じて支援対象団体が学んだこと

支援対象団体の中心的な態度は、その団体のバイアス(偏見)を示唆します。つまり、伴走支援から得られる情報のうち、何に着目し・重要と感じ・学ぼうとするか、の違いが分かります。言い換えると、支援団体は、特定の視点(偏見)からのみ部分的に価値を切り取られていることを自覚し、支援対象団体だけでは気付けない、他の視点からの価値も含めた価値の全体を意識的に伝えていくことが必要といえます。

団体	ライフデザインラボ	ぐるんとびー (地域交流スペース)	子育ての輪Lei
態度	イネーブラー(後援者)	サポーター(援助者)	プランナー(企画者)
こまちぷらすから得た活動成長のヒント	個々の市民参加の段階を見極めながら関わる	利用者の視点で考える	メンバー間で密にコミュニケーションをとる
	活動経験をコンテンツ化し伝える	日頃の活動から得た地域・住民ニーズを具体化する	つながった人を巻き込む仕組みをつくる
	活動経験や感情を言語化する	関わる人の多様性を高める	幅広い役割・出番をつくり関わりやすくする
	他団体・活動とつながり社会の多様性に触れる	関わる人の多様性を活かす	活動への多様な関わり方を受け止める
	メンバーが楽しみながら活動できる工夫をする	自然と人が集まる場所がある	やりたかったことを叶える機会をつくる
			任せて個々の能力や主体性を引き出す
			支援機関と関係構築する

表7: 伴走支援を通じて支援対象団体が学んだこと

以上のことから、伴走支援においてはまず、支援対象団体の将来ビジョン(未来の地域に対する理想像)と、紐づく中心的な態度(文化)を定性調査・把握することが、支援効果を最大化するうえで重要なプロセスであることが分かりました。

2.【寄稿】支援対象団体への個別訪問から

居場所からはじまる、しなやかな市民参加のカタチ

室田信一（東京都立大学）

「強い市民」と「弱い市民」

市民参加というと少し肩に力が入った、意識の高い取り組みのような印象を受けることがあります。それは市民という言葉に伴う「強い市民」のイメージが私たちの中にあるからかもしれません。社会に対する問題意識を抱き、多くの人を巻き込んで、社会に積極的に働きかけていく。確かに日本の市民社会の歴史を紐解くと、そうした「強い市民」のイメージがあるかもしれません。多くの市民が「強い市民」として社会活動に積極的に参加し、社会に影響を与え、社会を変革していくことは、間違いなく強い市民社会をつくることでしょう。



一方で、そうした「強い市民」としての参加だけが市民参加の唯一のカタチではありません。市民としての意識や市民を代表するというような感覚は特別なけれども、身近な地域活動に対して、何か手伝えることはないかと思って参加することや、日常の生活の中で、ちょっとした困りごとを助けてもらった経験から、少しでも恩返しをしたいという気持ちで参加すること、自分一人だとか弱い存在かもしれないけど、同じような思いで地域の中で暮らしている仲間と出会うことで、何か一緒にできるかもしれないという思いから参加することなど、市民参加のカタチは多様なものです。



日本社会においては、1990年代ごろから、市民活動に参加する市民の中にひとり暮らしの高齢者や精神障害者、生活困窮者など従来は支援を受ける立場の人たちが積極的に参加するようになったといわれています。そのような市民像を「強い市民」に対して「弱い市民」と呼ぶことができますが、ここでいう「弱さ」とは、単なる弱さというよりも、弱者の痛みを知る力をもっている人のことを形容しています。

経済が右肩上がり、生活のあり方や人生のレールが強く規定されていた時代は、その社会を引っ張っていく「強い市民」が求められていたのかもしれませんが。それに対して、現代社会は先行きが不透明であり、物事を判断する価値規範が混沌としています。人の生活のあり方や人の生き方が多様化する中で、状況に応じて柔軟に対応する力や相手に共感する力が求められます。「強い市民」による市民参加をハードな（硬い）市民参加としたら、「弱い市民」による市民参加はソフトな（しなやかな）市民参加と呼ぶことができると思います。

今回の市民参加促進プログラムを通じて見えてきたものは、居場所を通して育まれているしなやかな市民参加のカタチです。

サグラダ・ファミリア、渚、部室

今回のプログラムに参加した3つの団体の特色を捉えと、「サグラダ・ファミリア」と「渚」、「部室」と整理できるのではないかと思います。この3つの特色はどの団体にも共通するものですが、各団体のお話を伺う中でその特色が特に表れていた団体と結びつけて説明します。

まず、サグラダ・ファミリアですが、言わずと知れたスペインのバルセロナにある、建築家ガウディによって設計された教会です。1882年に着工して以来まだに完成していませんが、完成する前に修繕工事をしなければならない状態となり、常に工事が繰り返される未完成の建造物としても有名です。ライフデザインラボの活動には、このサグラダ・ファミリアの「未完成であり、常につくりかえる」という特色が強く表れているといえます。



ライフデザインラボは、文字通り地域における生活をデザインするラボ（研究所）として活動しています。常に新しいことを試し、試しながら活動を進めています。毎月「研究員会議」を開催して、そこで新しいアイデアを出し合いながら、次なる試みにみんなで取り組んでいます。



ライフデザインラボを創設したのは代表の船本さんですが、船本さんはまさに「弱い市民」像を体現するような人です。リーダーとして団体を引っ張っているというよりも、次に何をすれば良いのか悩んでいることが多いそうです。興味深いことは、船本さんが悩んでいることに、本人よりも先に気づいて指摘してくれるのがメンバーということです。メンバーみんなで船本さんの抱えているものを棚卸するという会も開催されたそうです。

未完成の実験場に多くの研究員がかかわり、その研究員一人一人の個性が活かされながら団体の形が常に変化している様子はまさにサグラダ・ファミリアのようです。完成した活動に参加するのではなく、かかわるメンバーが研究と創造のプロセスに参加できる、そのような場がライフデザインラボです。

次に、渚です。渚というのは海や湖などの波打ち際のことです。渚は水と空気が循環する場所で、そこは豊かな土壌となり、多くの海産物が育ちます。大阪ボランティア協会という団体をその設立時から長年支えてきた岡本栄一さんは、地域における渚の重要性を指摘してきました。福祉施設の多くは地域と断絶していることが多く、その様子はあたかも地域という海の中に浮かぶ小島の断崖絶壁の上に建つ施設のようなものです。岡本さんは、施設と地域の間には渚のような空間が必要だと考えました。ここでいう渚とは、海から豊かな栄養を運んでくる波のように、地域住民が交流する空間を指しています。



ぐるんとびーのコミュニティスペースはまさに渚といえます。団地の一室を活用して小規模多機能ホームを開設したぐるんとびーは、団地全体を一つの村と捉えて、村づくりに取り組んできました。それと同時に、団地の前の公園を活用した地域活動の推進や、地元のお祭りへの参加など、常に地域という海を意識した活動をしてきました。設立当初から働いているスタッフの一人は、施設職員であると同時に地元住民であることを大切にしている、地元のまちづくり委員会の委員も務めています。そのように、地域という海と施設という陸の間にたくさんの人の往来があり、豊かな渚が形成されてきました。その象徴となる場所がコミュニティスペースです。



介護サービスを必要とする高齢者にとっての施設を運営しながらも、利用者を利用者という役割にとどめてしまうのではなく、利用者が「弱い市民」として様々なレクリエーションやイベントに積極的に参加することで、団地という村の中に利用者同士、さらには利用者以外の住民も一緒になって助け合う関係性が構築されています。

最後は部室です。部室とは中学校や高校の部活動のための部屋のことです。部活動ごとに独立した部屋がある中学校は珍しいと思いますが、高校になると学生自身が管理する部室が用意されている学校が多かったのではないのでしょうか。厳しい練習に耐えて部活動を続ける理由は、大会で結果を残すこともありますが、それと同じくらい、そこに部室があって、仲間と他愛もない会話ができてるところにあると思います。家でも職場や学校でもないそうした空間を第三の居場所（サードプレイス）と呼んだりします。大人になると、家と職場の往復の毎日になったり、家だけが唯一の居場所という人が少なくありませんが、自分に合った第三の居場所を探すことは簡単ではありません。

子育ての輪Leiが運営する多世代交流スペース「れいんち」はまさしく部室のような空間といえます。れいんちは手作りパンやお惣菜を販売したり、ワークショップをするなど様々な目的で活用されていますが、開設してから3年間、人がれいんちに滞留することはあまりなかったそうです。しかし、2021年になってから毎週月曜日はれいんちを開けて、Leiの活動にかかわっているメンバーが自由に集まれる場所にしたら、雰囲気が変わってきたそうです。Leiの活動は、れいんち以外にも防災講座やコミュニティ食堂、マルシェなど多岐に渡ります。その多様なメンバーが何か目的があって集まるのではなく、毎週月曜日にふらっと立ち寄って、他愛もない会話をします。そこでの会話の中から、新しい活動のアイデアが出てきたり、次はこれをやろうという話で盛り上がったりするそうです。

れいんちに部室機能が加わったことで、多くのメンバーにとって第三の居場所となっているように思います。同時にその様子は、地域をしたたかに変えていくための作戦会議をするアジトのようでもあります。



ライフデザインラボ

一人一人の個性が活かされながら
団体の形が常に変化

ぐるんとびー

団地全体を一つの村と捉え
利用者、スタッフ、住民が一緒になって
助け合う関係性を構築

子育ての輪 Lei

「れいんち」を、他愛もない会話から
アイデアが生まれる場に

しなやかな市民参加を支える〈知〉

最後に、上記3団体とこまちぷらすを加えた4団体の活動を支える〈知〉について考えてみたいと思います。各団体のお話を伺う中で、活動の参考となった考え方や思想に気がつくことができました。たとえば、長田英史さんの『場づくりの教科書』という本を参考にしたという話がありました。長田さんは東京都町田市で長年市民活動に携わってきた方で、金魚玉珈琲というコミュニティカフェを運営してきたことでも有名です。長田さんの場づくりの考え方の基本は、ありのままの自分を出せるということです。肩に力を入れて成功を求めるのではなく、自分らしくあることを大切にします。それは自分の醜いところや弱いところ、だらしのないところを隠さず、それも含めて自分であるという態度で人と向き合うということだと思います。4団体の活動には随所にそうした自然体のリーダーシップを確認することができました。

次に、ぐるんとびーさんの名前の由来でもあるグルントヴィについて少し触れたいと思います。N.F.S.グルントヴィは近代デンマークを代表する思想家であり詩人です。デンマーク民主主義の源流として多くの思想家や教育者に影響を与えてきた人です。デンマークに今も多数存在するフォルケホイスコーレという学校教育のあり方にも大きな影響を与えました。フォルケホイスコーレでは、学問のための学びではなく、より社会的で実践的な学びを大切にしていますが、ぐるんとびーに限らず、4つの団体はどれもメンバー内の対話や、地域住民との対話交流を大切にしている、まさに社会的で実践的な学び合いの場となっているように思います。

こまちぷらすはCRファクトリーというNPOのコミュニティづくりのノウハウを参考に実践しています。CRファクトリーが考案した「興味→愛着→主体」という主体形成のステップを元に、こまちぷらすではCRファクトリーの伴走支援を受けながら「無関心→興味→愛着→まちの担い手」という居場所における主体形成のステップとして整理し、こまちぷらすの取り組み市民参加はまさしくこのステップを実践しています。そうしたノウハウが、他の3団体との交流を通して徐々に共有された部分があったと思います。



市民参加を支えるこうした〈知〉は活動を支える軸として欠かすことができないでしょう。一度身につけた〈知〉は、その団体の肉となり骨となりその団体の活動を支えますが、閉じられた環境の中で信仰を貫いた隠れキリシタンの人たちの教義が、本来の基督教の教えとかけ離れたものになってしまっていたように、コミュニティ活動を支える〈知〉も、他の多くの団体と対話交流しなければ、いつしか独善的なものになってしまう危険性があります。そのような状況を回避するためにも、こうした交流を今後も継続して、お互いの実践から学びあう関係が継続されることに期待します。

1. 対象団体の選定について

今回、3つの参加団体の選定にあたっては以下の条件を満たした団体を候補とした上で、こまちぷらす担当者が訪問にて本事業について説明し、対象団体側に本取り組みに参加の意思があるかどうかを確認しました。

【選定における条件】

- ・カフェや交流スペースを「固定の場」として運営している。
- ・コーディネーター的人材を複数名置くことを視野に、研修に複数名で参加できる。
- ・「本人の暮らしが豊かになる」市民参加が増えることで、結果的にまちの豊かさにつながる状態を一緒に目指す。

①の条件において場を「固定」としたのは、場のスタイルはそれぞれであっても、こまちカフェでの取り組みがより応用しやすく、機会の導入のしやすさやしにくさが確認できると考えたためでしたが、今回は比較的新しく場を持つことになった団体（子育ての輪Lei、ぐるんとびー）と、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて場を閉鎖することとなった団体（ライフデザインラボ）の実際の活動においては、固定の場の可能性も活かしながら、屋外やオンラインでのイベントと両輪で人とのつながりや新たな参加を生み出すこととなりました。

②の条件については、集合研修にはそれぞれの団体から複数名参加していただきましたが、複数名で参加することで、自団体に持ち帰り他のスタッフとの共有や、実際に事例を取り入れることがスムーズになるということが見られました。一方で、研修参加後に、それぞれの団体でコーディネーターを複数名スタッフとして配置するという点については、団体の組織基盤や財政状況によっては難しいということも明らかになりました。

③の条件では、地域課題の解決のための市民参加ではなく、まずは本人の暮らしが豊かになる参加であることを大切に、その先に「まちの豊かさ」につながることや、地域課題にアプローチできる状態を一緒に目指したいと考えました。それぞれがイメージするまちの範囲は、団体の活動の特色により様々であること、その違いからもお互いにヒントを得ながら学び合うことができました。

また、「市民参加」についても、本報告書6章の外部専門家からのレビューにもあったとおり、団体に関わる人の層や団体が目指す姿やありたい姿によって、それぞれの生み出したい「参加」や大切にしたい「関わり」があることも改めてわかりました。



2. 支援の方針・内容について

まちの担い手が生まれるモデルのアップデート

今回の支援においては、本書2章(P.10)のとおり、「まちの担い手が生まれるこまちカフェモデル」を元に3団体に事例やノウハウをお伝えしましたが、私たちのこまちカフェでの取り組みも実践を重ねながら常にふり返し、今後の取り組みについて見直しをしながら進めており、このモデルは完成するものではなく、アップデートし続けるものであると考えています。

この2年間での活動の中で、特に2020年度はコロナ禍での活動となり、オンラインでのおしゃべり会の参加者や、親子一組でカフェにランチにいらっしゃる方々との接点が増えました。そのような方々がこまちカフェに愛着をもち、活動に興味をもつ団体において、パートナー登録よりも手前で活動に主体的に参加できる機会が必要だということが見えてきました。そこで、興味層の方々が気軽に参加できる意見交換の場や短時間でできる手伝いなども少しずつ取り入れています。

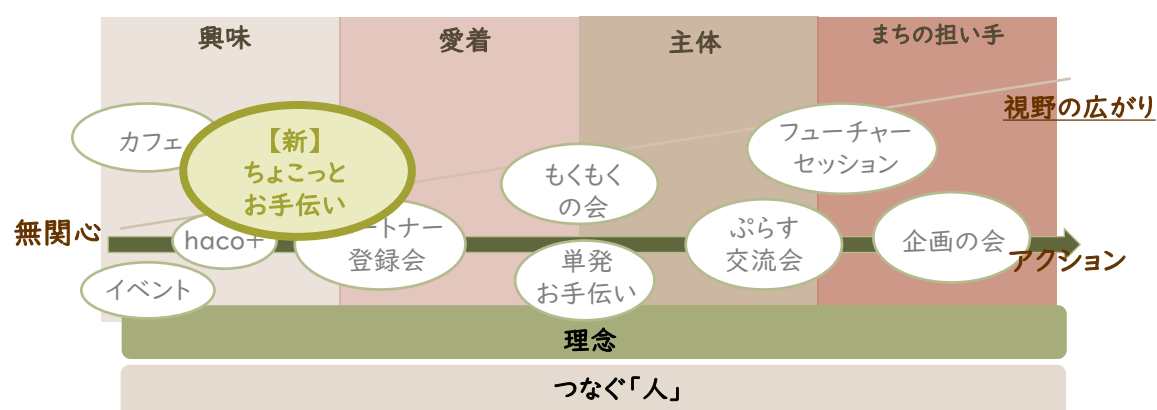


図15:こまちカフェモデルのアップデート

私たちも、3団体の皆様と学びあう機会を持てたことは、自らの仕組みを見直す機会にもなりました。また、モデルのアップデートとその背景も実践として伝えていくことも併せて今後も行っていきたいと考えます。



支援団体の組織文化を踏まえた個別支援方針の早期確立

団体への支援を行ううえで、支援団体の文化を把握し、それに見合った支援を行うことが重要です。ここでいう「文化」とは、個人や集団が持つ、ものの見方、考え方、感じ方、行動のパターンのことです。つまり、支援団体が、こまちぷらすの支援をどのように受け取るのか、という点に留意し、「相手への伝わり方を意識して伝える」ことが、支援効果に大きく影響します。

今回の支援では、事業の後半に外部専門家による支援レビューを行う一環として、支援団体の文化を分析・把握しました。このとき、支援団体に分析結果を共有することで自己理解が深まり、自ら新たな課題感を言語化したり、対策案を見出したりする効果が得られました。

このことから、今後、団体への支援を行う場合には、支援早期に文化の把握と共有を行い、支援方針を確立することが重要であるといえます。文化の把握には様々な方法がありますが、なかでも、心理療法のひとつとして知られる認知行動療法の中で用いられる「自動思考」や「スキーマ」といった考え方が有効であると考えられます。

自動思考とは、ある出来事に遭遇したり、状況に置かれるなど、人が外部刺激を受けたとき、それに対応して非常に素早く、自分の意志とは関係なく自動的に生じる思考のことです。スキーマとは、過去の経験の蓄積によって形成される、自身や他者、世界に対して抱いている概念であり、中核信念とも呼ばれます。

認知行動療法は一般的に、個人の心疾患の治療に対して適用される方法ですが、先の「文化」の定義からみれば、集団・組織の文化の把握に対して適用することにも有用性があると私たちは考えています。

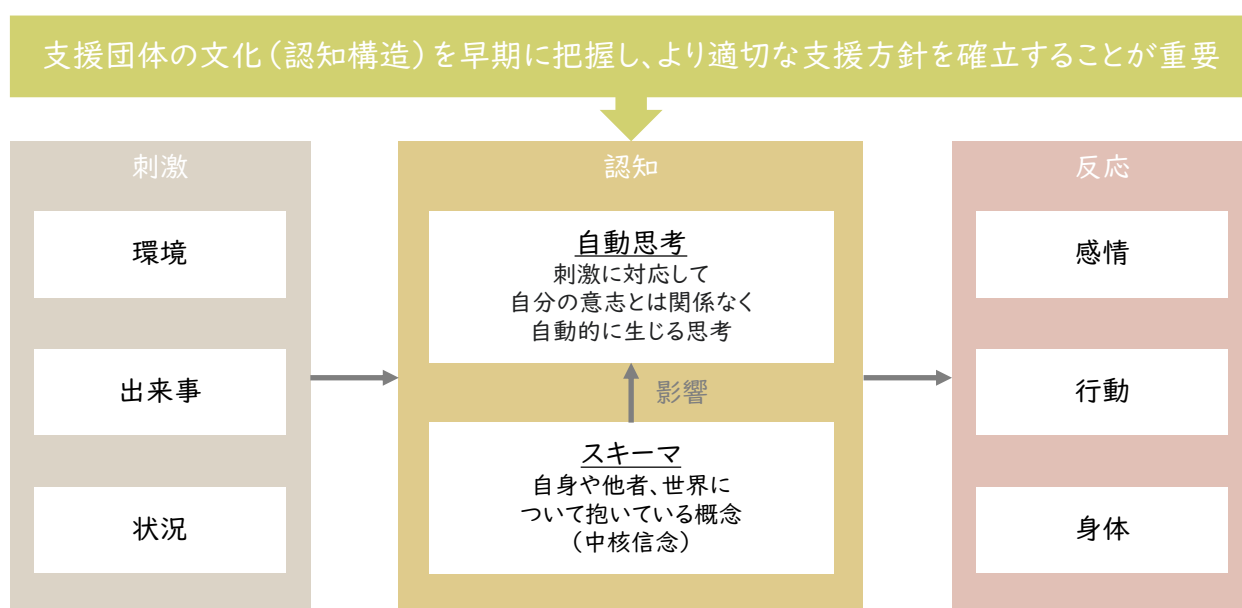


図16: 支援団体の組織文化を踏まえる

心理的安全性の高い組織や場づくりの重視

団体として活動を行ううえで、「心理的安全性」の高い組織を作ることが重要です。心理的安全性の高さは団体の基礎体力であり、既存・新規を問わず、全ての事業成果に大きな影響を及ぼす要因であると言っても過言ではありません。

心理的安全性とは、対人関係においてリスクある行動を取ったときの結果に対する、個人の認知の仕方のことです。心理的安全性の高い組織には、自分の考えや感情について気兼ねなく発言できる雰囲気や環境があります。個人が発言しやすいため、メンバー間のコミュニケーションが活発になります。結果、個々の能力の合算を超える、チーム力の高い組織が形成されます。

今回の支援では、事業の後半に外部専門家による支援レビューを行う一環として、支援団体がこまちぷらすの支援から受けた影響を把握する個別インタビューを行いました。ここで支援団体から、「活動経験を言語化し、教育コンテンツ化や情報発信をしている」、「メンバー間で密なコミュニケーションが取れている」など、こまちぷらすの組織に対する心理的安全性の高さを伺わせる回答が多く寄せられました。

このことから、具体的な事業支援を行うことに加えて—むしろそれよりもまず、支援団体の心理的安全性を高める組織づくりの支援が重要であることが分かります。そして実際にこうした支援を行うためには、こまちぷらすが比較的に心理的安全性の高い組織である、という自覚が必要です。

対人関係における気付きの状態を示すことで知られる「ジョハリの窓 (Johari window)」では、自分は気付いていないが、他人からは見られている自己のことを「盲目の窓 (Blind self)」と呼びます。よりよい団体支援を行うためには、こまちぷらす自身の盲目の窓を小さくする取り組みの必要性を示唆しています。

支援団体の組織から4つの不安を減らし、心理的安全性を高めることで支援成果を高める

心理的安全を損なう要因	結果として現れる行動
<u>無知</u> だと思われる不安	分からなくても質問しない
<u>無能</u> だと思われる不安	自分の弱みやミスを認めない
<u>邪魔</u> をしていると思われる不安	アイデア(変化)の提案をしない
<u>ネガティブ</u> だと思われる不安	現状を批判しない

表8:心理的安全性を損なう要因

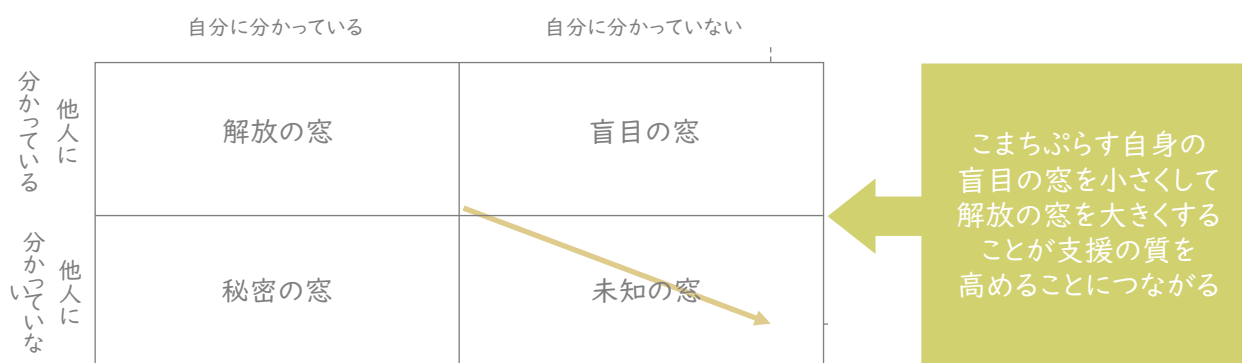


図17:ジョハリの窓

内外の環境変化に対応し得るアジャイル型支援の実施

市民活動団体は、ヒト・モノ・カネといった活動資源が常態的に不足している傾向があります。加えて、昨今の新型コロナ禍のように、対面接触が回避されるような状況に陥った場合、市民活動の根幹を成す「交流」や、それを目的とした「居場所づくり」、「イベント」といった事業の実施・継続が困難となります。こうした外的環境の変化は、活動資源のさらなる不足を引き起こす要因となります。

今回の支援では、支援団体に対するアセスメントやメンタリングを行いつつ、おおよそ年度単位での支援計画を立てて実施してきました。しかし実際には、組織体制の変更や新型コロナ禍など、内外の環境変化を受けて、支援最中での方針見直しを余儀なくされました。

このことから、より変化への対応力を高める支援方法として、1～3ヶ月程度を基本単位とするサイクルを繰り返し、都度、支援方針を見直すような、「アジャイル（agile）」型を採用することが望ましいと考えます。

アジャイルとは、機敏な、すばしっこい、といった意味の言葉に由来する、ソフトウェア開発方法のひとつです。強く要求される機能を優先的に、短期間の開発サイクルを反復して開発することで、提供スピードの向上や変化への柔軟な対応を可能とする特長があります。同様の考え方を起業プロセスに適用した「リーン・スタートアップ（Lean startup）」という方法があることから、アジャイルは、資源が不足する状況で変化に対応しつつ活動を進展させる方法として適しているといえます。

アジャイルでは、開発サイクルの区切りごとに、ピボット（pivot）と呼ばれる軌道修正を行います。短期間の支援結果をもとに、より適切な支援へと軌道修正するプロセスを、支援団体とこまちぷらすの双方が共有することは、内外の環境変化への対応力を高めるほか、より実験的な支援にチャレンジできる（リスクを取れる）関係が構築できるなど、副次的な効果も期待できると考えます。

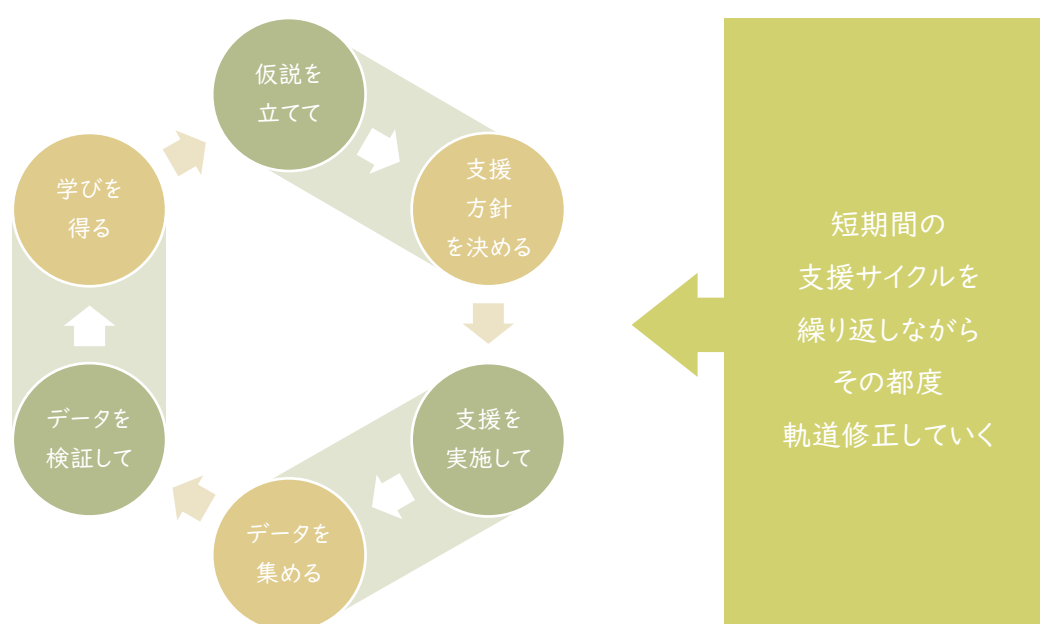


図18: アジャイル型支援の実施

支援経緯の情報発信

市民活動団体における情報発信は、必要性・重要性を理解しつつも、係るコストの高さゆえ、優先順位が下がりがちです。具体的には、情報鮮度の高さを維持し続けることの大変さ、ウェブページやSNSといったサービスを使いこなすICTリテラシの不足などが挙げられます。しかし、市民活動では日々の活動の様子（アクティビティ）をこまめに発信することが重要であり、限られた資源の中で活動と情報発信をバランスよく行うことは、団体運営における典型的な問題のひとつと言えます。

今回の支援団体は、ウェブページやブログ、SNSなど、複数のメディアを通じて情報発信を行っているものの、メディア間の情報連携が取れておらず、情報鮮度が一致しない状態も見受けられました。団体の関係者であればどのメディアを見ればよいか分かるものの、新たに団体のことを知ろうと情報閲覧した人にその区別はできず、「最近は活動していないのかもしれない」といった誤解を生じるリスクがあります。

このことから、団体支援の実施と並行して、支援経緯の情報発信をこまちぶらすのメディアを通じて実施することが望ましいと考えます。例えば、こまちぶらすのウェブページに掲載した支援の様子を、支援団体が自身のFacebookページで共有する、といった団体間の情報連携を行うことで、団体の情報発信コストを下げつつ、活性度を高める効果が期待できます。

デジタル・マーケティングにおけるメディア戦略に、「PESO」があります。PESOは、Paid Media、Earned Media、Sheard Media、Owned Mediaの頭文字による造語で、伝統的か進歩的か、提供者側と発信者側のどちらに決定権があるか、の4象限でメディアの特徴を分類します。PESOは単にメディアを分類するだけでなく、昨今はOwnedとSheardを活用することの重要性が高まっていることを示しています。広告宣伝費が潤沢でない市民活動団体において、このメディア戦略は定石と言えるでしょう。

所有メディアと共有メディアを駆使して情報発信コストの削減と効果の最大化を目指す

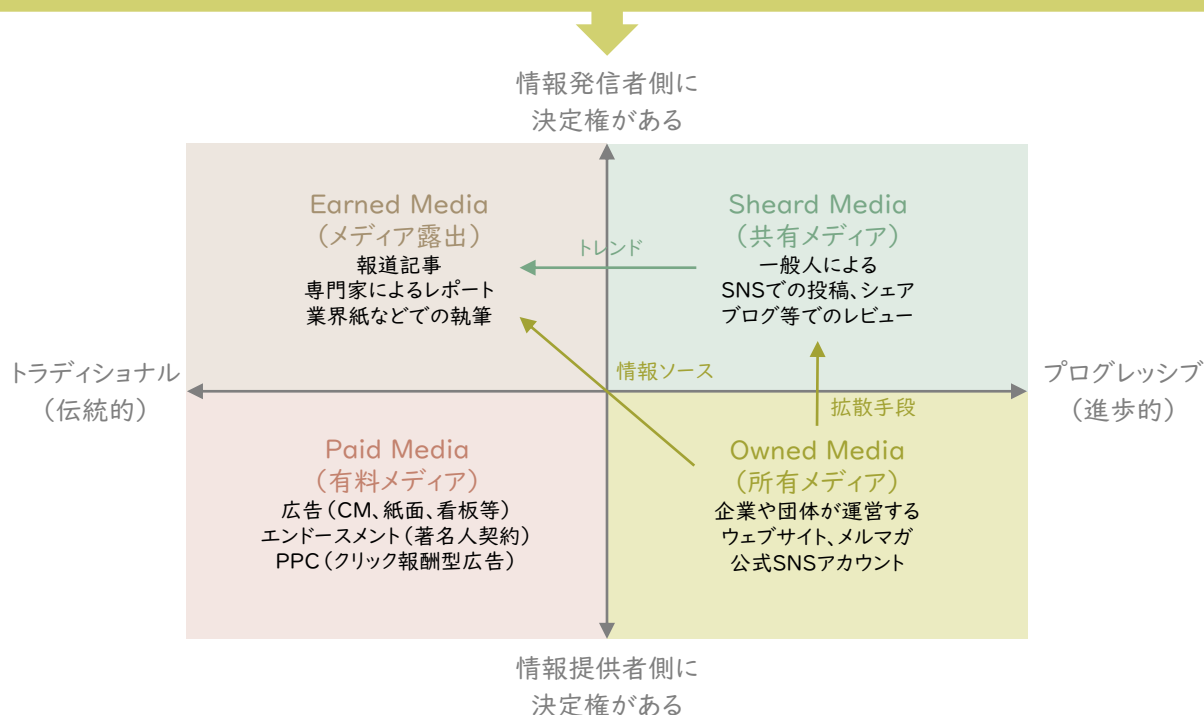


図19: 支援経緯の情報発信

3. 交流型集合研修を通じた学びあう関係の構築

今回の集合研修においては、こまちぷらす1団体の事例からのみではなく、4つの団体が互いにヒントを得ながら、実践における葛藤も含めて話し合える双方向の関係性を築けたことが大きな意味を持っていると考えます。

また、本事業に取り組みながら、こまちぶらす自身も多くの団体の様々な市民参加を知る必要性を感じ、本助成事業に加えて自主財源により、全5回の「居場所づくり学びあい講座」を4期にわたり開催し、多様な組織や居場所での実践への応用に取り組んできました。その結果、岩手県、埼玉県、兵庫県など県外からの参加者もあり、多様な地域・組織・テーマをもつ居場所におけるコーディネートや運営の悩みに触れる機会となりました。

どちらの取り組みにおいても、こまちぷらすの事例を一方的に伝える場ではなく、課題も共有しながら双方向に学びあえる時間とすること、また講座修了後も相談しあえる関係性を築くことに重点を置いて実施してきました。今後は、これらの講座に参加された団体や個人が、期をまたいでネットワークを作り、学びあいながら周囲に伝えていくようなコミュニティを築いていきたいと考えております。

これまで参加された方の中には、団体としてご参加の方の他個人で居場所づくりに取り組まれている方やこれから居場所づくりに取り組もうとされている方も多くいらっしゃいました。居場所や参加のあり方が多様となり、それぞれが自分にあった活動を選べるようになるには、運営者自身が、自分の活動を誰かに伝えながら学びあう相手を持てることが重要です。相手の活動から学び、取り入れ、気づきをフィードバックする関係を本事業での気づきを土台に、今後も取り組んでまいります。



4. 外部専門家の活用と支援者間のネットワーク

この2年間は、私たちこまちぶらすにとっても、多様な地域・組織・テーマをもつ居場所におけるコーディネートや運営の悩みに触れる機会となりました。コーディネーター（研修参加者）自身の学びや意識の変容が起こっても、それが実際に組織の取り組みに反映されるには、組織内のコミュニケーションなどさらなる工夫が必要であることや、組織の基盤が安定していることなど、組織運営全体に関わる専門的な知識も必要になり、私たち自身も悩むことも多くありました。

今回、本取り組みの後半で2名の外部専門家の力をお借りすることで、各団体が自団体の特徴や強み、課題をより理解することや、今後も方向性を見いだす上で大きなヒントを得ることができましたが、このようにして支援する側の団体にも、必要とされる領域の専門家に相談できることや、支援側の団体同士のネットワーク等により、相互にメンタリングや情報交換ができるような体制があることで、それぞれの現場にもたらす効果をより大きなものにできると考えます。

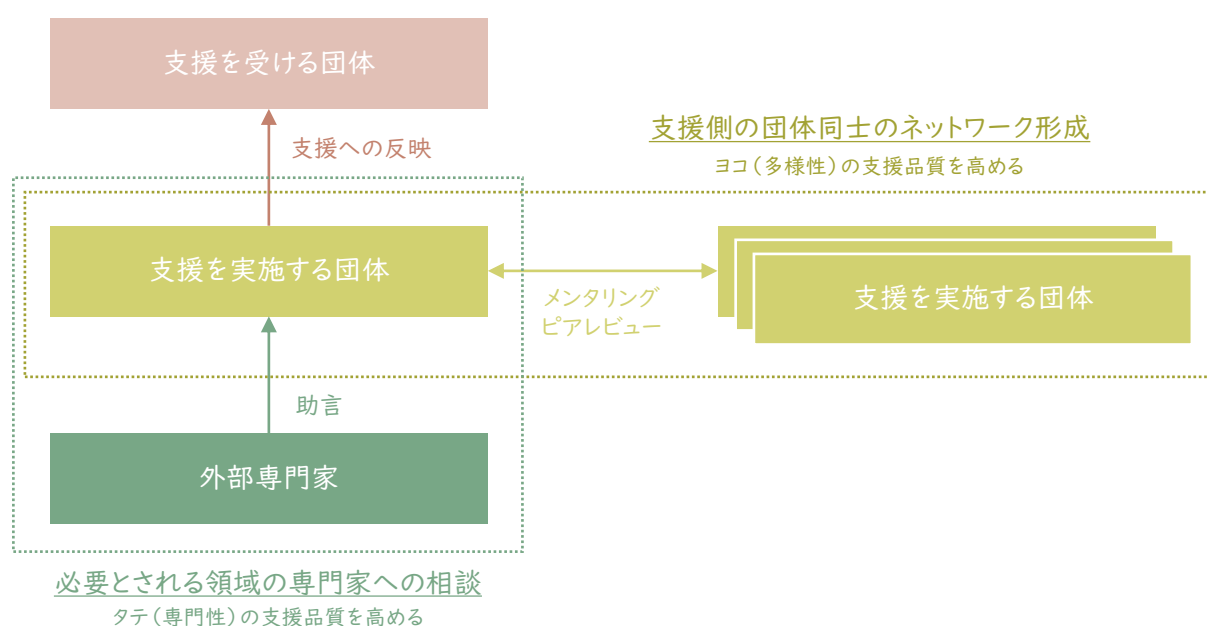
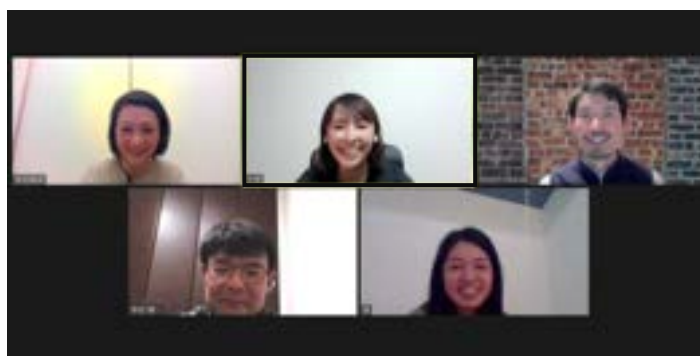


図20：外部専門家の活用と支援者間のネットワーク

おわりに

市民参加のコーディネート力は、型を学んでもその組織らしい形に落とし込むことは容易ではありません。その理由としては、①コーディネートの重要性を組織中心メンバーがし、組織全体としての優先度を上げていくというプロセスがまず必要である事②コーディネートする人材を発掘し、その方が実際にコーディネーションをしたいと思うようになり、そのコーディネートする環境を得る必要がある事（他の仕事や家庭環境等も含む）③コーディネートをする方も学びと実践を繰り返せる環境と時間を実質的にも得ながら、市民参加の機会設計や参加のあり方について考え深める取り組みを作っていく息の長いプロセスが必要であることが挙げられます。

組織によっては①や②に1-2年かかる場合もあり、組織体制や文化を形成していくような大きな話に発展することもあります。市民参加の促進のためには、この内省や対話を繰り返す時間そのものが重要であることを今回実感しました。反対に、ここが固まれば型を参考にいかようにもその団体らしいコーディネーションを発展させ、訪れる市民/参加する市民の方々といろんな事業を深く広く展開することもでき、その事業を通して更なる市民参加が促進されるという循環が生まれていくという可能性も感じました。

そのダイナミズムをつくるためのプロセスに、外からの目線や視点が入る事が大きな力になります。私たち自身も過去にそれを実感してきましたし、今回は3団体の皆様にとってその「外からの目線」になれるよう、外部専門家の皆様のお力も借りながら模索しました。「参加すること」がやはり個人もその周りの人も場も、そのまちな豊かにしていくことを関わる皆さまを通して実感し、立地や組織形態を問わずそれはどこであっても一緒であることも再確認しました。今後このような市民参加の促進プログラムが全国どの地域でも展開されていくことを心から願っています。

この機会にご一緒くださったぐるんどびー、子育ての輪Lei、ライフデザインラボの皆様、本当にありがとうございました。また、この事業を進めるために多大なお力を添えてくださった、東京都立大学室田信一准教授、株式会社イミカの原田博一様には心から感謝申し上げます。そして、本2年の取り組みを助成していただき、いつも親身に相談にのってくださったトヨタ財団の皆様にも御礼申し上げます。



本書を手にとってくださった皆様へ

こまちぷらすでは、本書にて紹介した「まちの担い手が育つ居場所モデル」の実践をベースに、居場所を運営している方や、これから居場所づくりに取り組もうとされている方々を対象とした講座を2021年度もさらに充実させて実施していきます。

2021年度からは、本助成事業で一緒くださったぐるんとびー、子育ての輪Lei、ライフデザインラボの皆様を始めとした、これまでこまちぷらすの講座に参加してくださった皆様や、これから参加して下さる皆様と、組織や地域を越えて学びあえるネットワークを築いていきたいと考えております。

上記取り組みにご関心のおありの方は、ぜひこまちぷらすまでご連絡ください。講座のご案内などお送りいたします。こまちぷらすのSNSでも随時ご案内いたしますので、フォローをお願いいたします。

こまちカフェ
facebook



こまちぷらす
facebook



居場所を通じた「自分らしい」市民参加を育む ～こまちぷらすと神奈川県内3つの居場所の実践と学びあい～

企画・編集 認定特定非営利活動法人 こまちぷらす
作成協力 株式会社イミカ
発行日 2021年3月26日初版
発行者 認定特定非営利活動法人 こまちぷらす 理事長 森 祐美子
横浜市戸塚区戸塚町145-6 奈良ビル2F

【内容についてのお問い合わせ】

こまちぷらすつながりデザイン事務局

HP : <http://comachiplus.org/wp/tsunagaridesignproject>

Email : tsunagari@comachiplus.org Tel : 045-443-6700

※本書の本文及び写真等をご使用される場合は、当法人までご一報ください。

本書は公益社団法人トヨタ財団法人トヨタ財団の助成をうけて作成いたしました。



子育てを、まちでプラスに。

**comachi
plus**